Kadokawa Comics A

Kadokawa Con
Fate
フェイト/ゼロ
9
漫画 真じろう 原作 虚淵玄 TYPE-MOON

第 42 話

Fate
フェイト/ゼロ
ゼロ
漫画 真じろう
原作 虚淵玄 TYPE-MOON
(ニトロプラス)

第42話

Contents

第 42 話
001

第 43 話
033

第 44 話
065

第 45 話
099

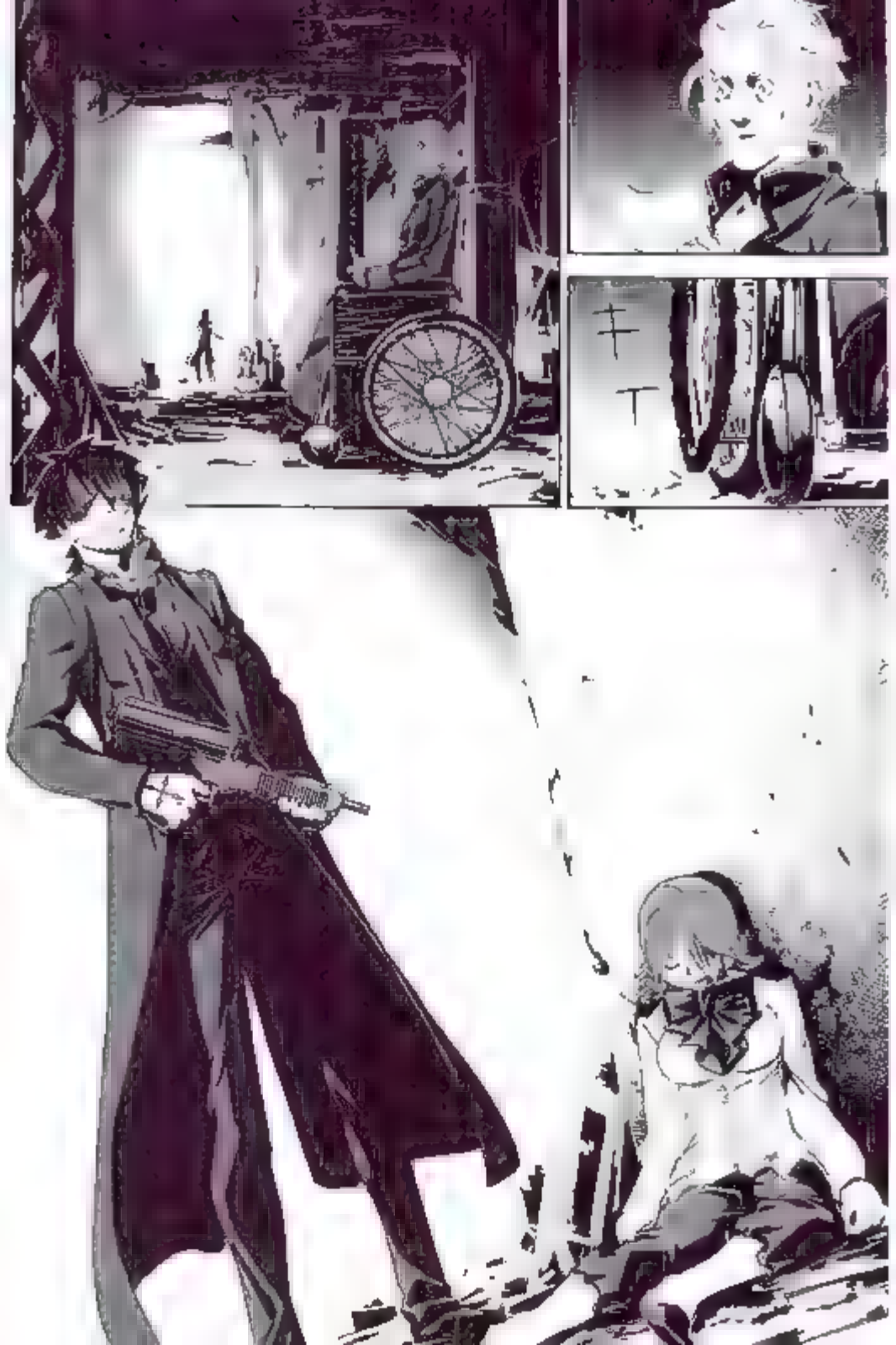
第 46 話
131

答えは明白――ランサーはセイバーより遥かに劣るのだ

当初の予定通りに
征服王をサーヴァントとして手中に収めていればきっとこんなことにはならなかった
「必滅の黄薔薇」を失った経緯はまだ聞き出していないが
ともかく左手の治癒を計った以上
対する勝算はますます薄くなった

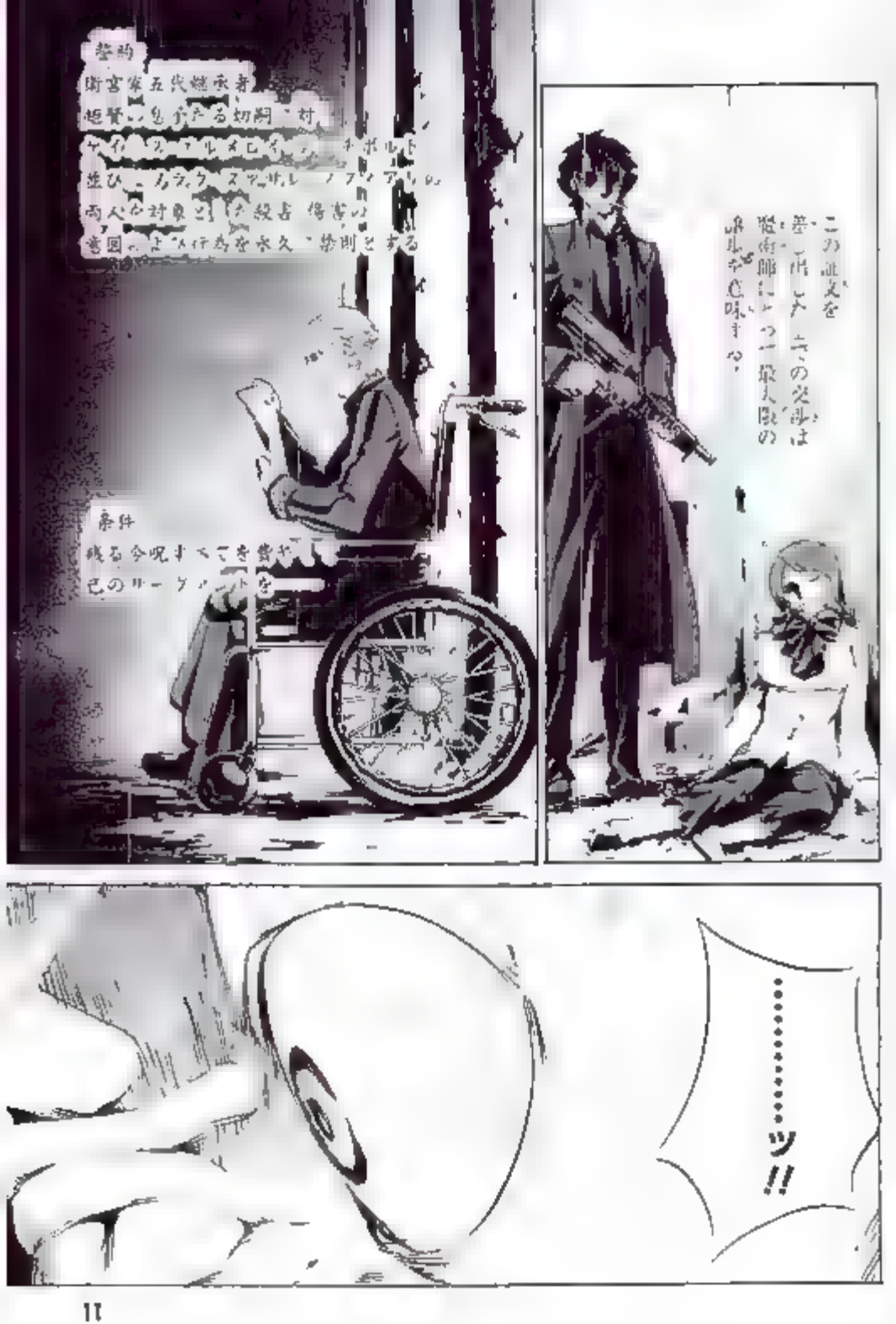
ならば
戦いを切り上げ
マスターを連れて
逃げるべきなのだ
何放戯開を
続けている!?
何より優先すべき
なのはソラウの
居場所を探り当て
救出することだというのに!

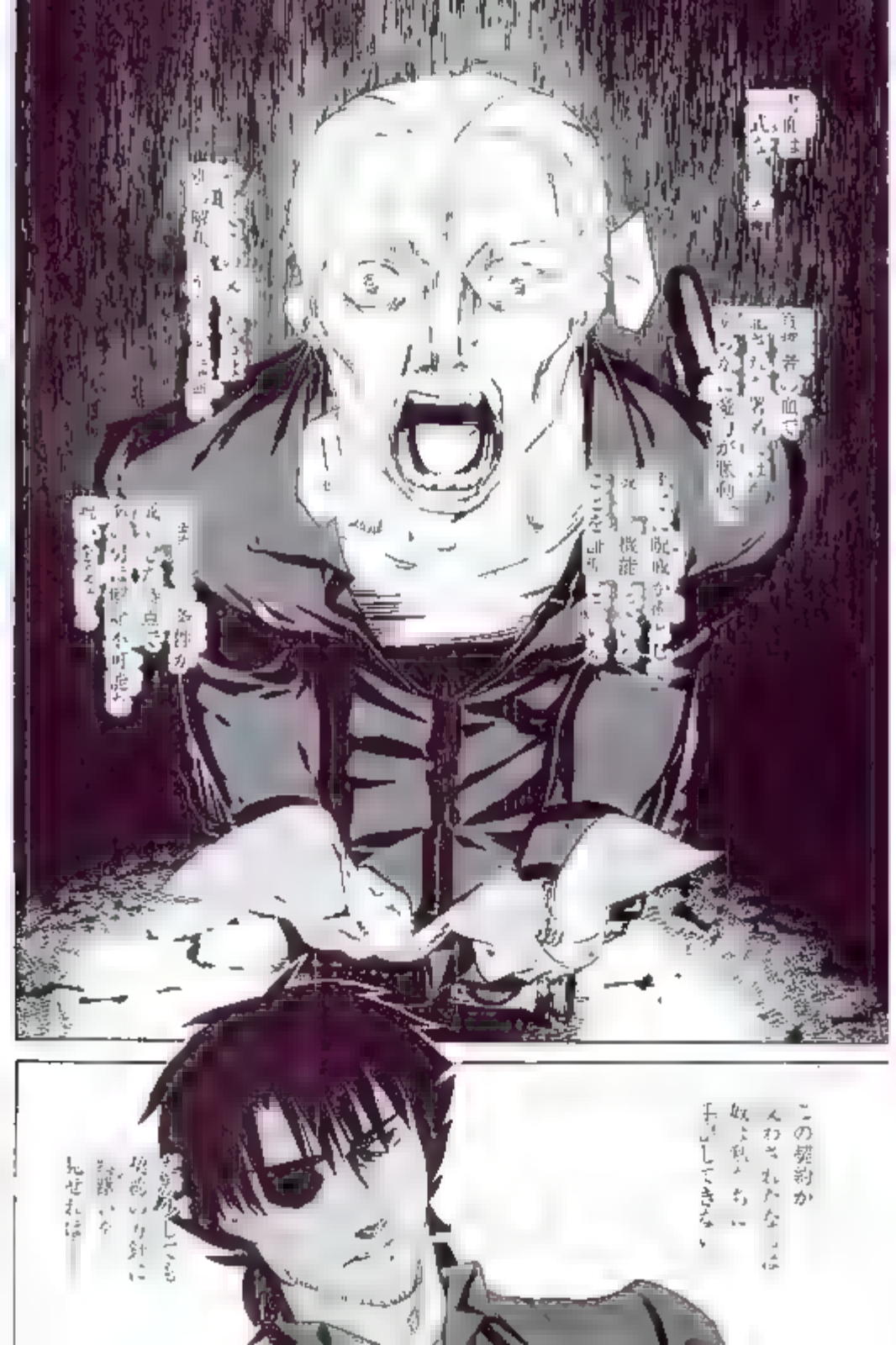
一体どこまであのランサーは愚鈍なのだ!?
その程度の状況判断すらままならないのかぁッ!?
ヒュウ
クソオオオオォ!!
!!
悪人を死なせたくなければ
声を立てずに後ろを見ろ

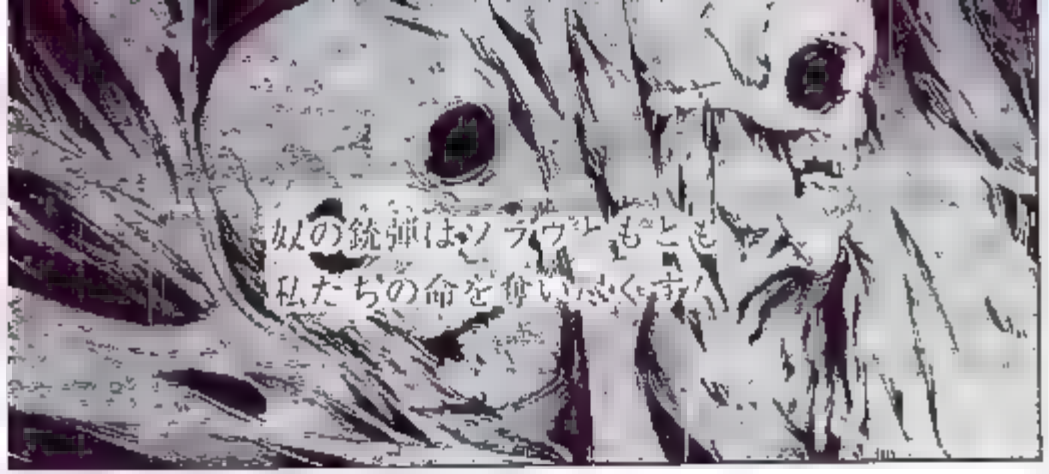


――…ッ！
ソラウ！
よりにもよって
奴が
ソラウの命を
奪うなどさせるものか
何かあるはずだ
ソラウの為に
出来る事が
ガシャ
ガリ

自己強制証文
術者本人の
強制利用を
かけること
絶対不能の呪
束縛術式 対象！術宮切開
術宮の刻印が命ずるもの也
下記条件の成就を前提とし
誓約は戒律となりて例外なく対象を縛る

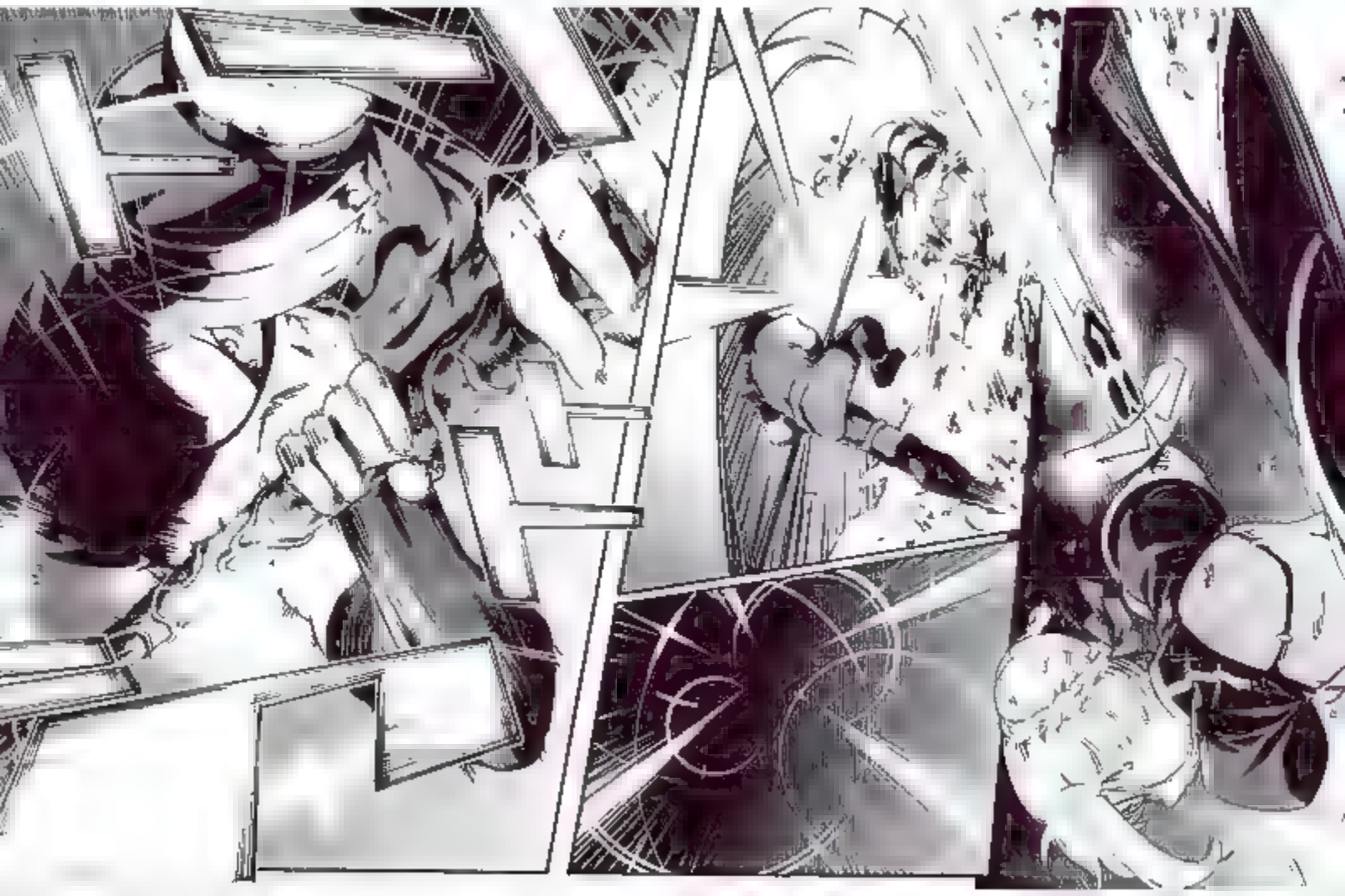

誓約
衛宮家五代継承者
超賢に危害を加える如何なる対
並びにクラス・サーヴァントの
両人を対象とした殺害、傷害の
意図による行為を永久に禁じる
承認
我ら令呪すべてを賭し
己のサーヴァントを
この証文を
差し出した
その交渉は
魔術師にとって最大限の
敬意を表する
……ッ!!




奴の銃弾はノラウィルスと共に
私たちの命を奪い続ける

選択の余地なし
ノラウィルスを直接取り込んだ者を喰らうことでノラウィルスを広げる

あぁっ ノラウィ



ランサーよ
令呪を以て命ずる

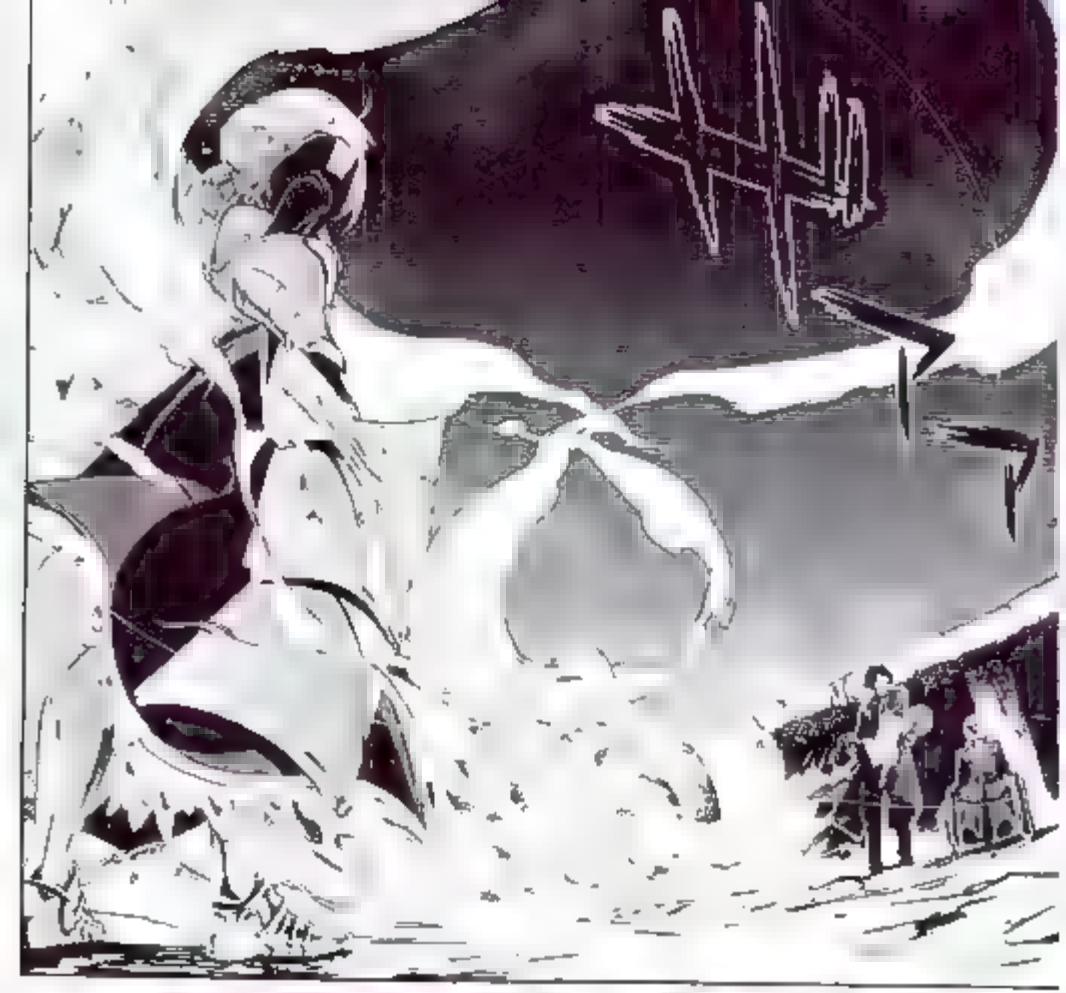
自決せよ

また……なのか
また俺はあの悲劇を繰り返すというのか
ツツ

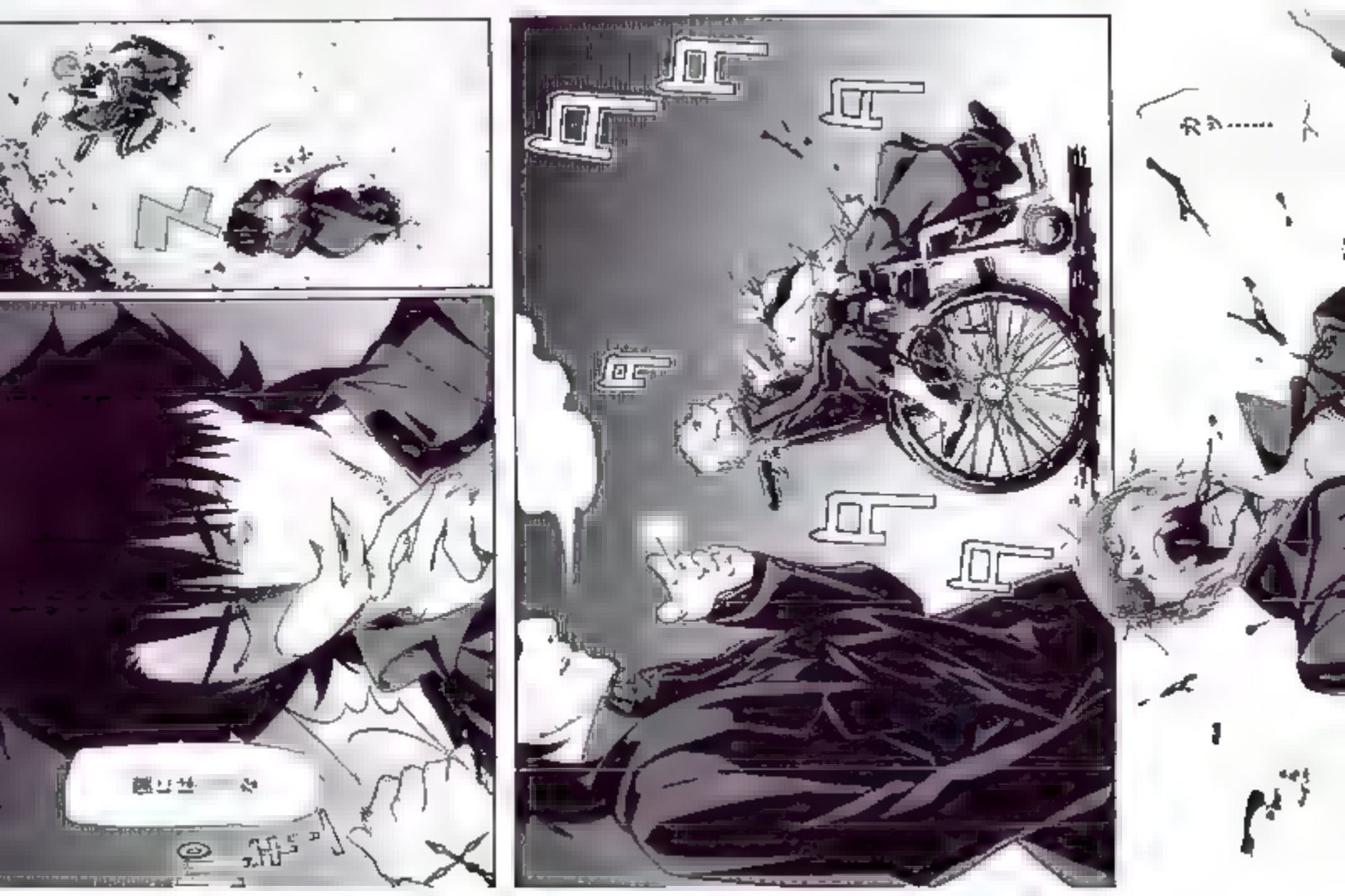
そういう、ことか…
奴隷らは…
そんなにも……

そんなにも
勝ちたいか!?
そうまでして
聖杯が欲しいか!?
この俺が……
たったひとつ
願いた祈りさえ
踏みにじって…!
貴様らはッ!
何ひとつ
恥じることも
ないのか!?

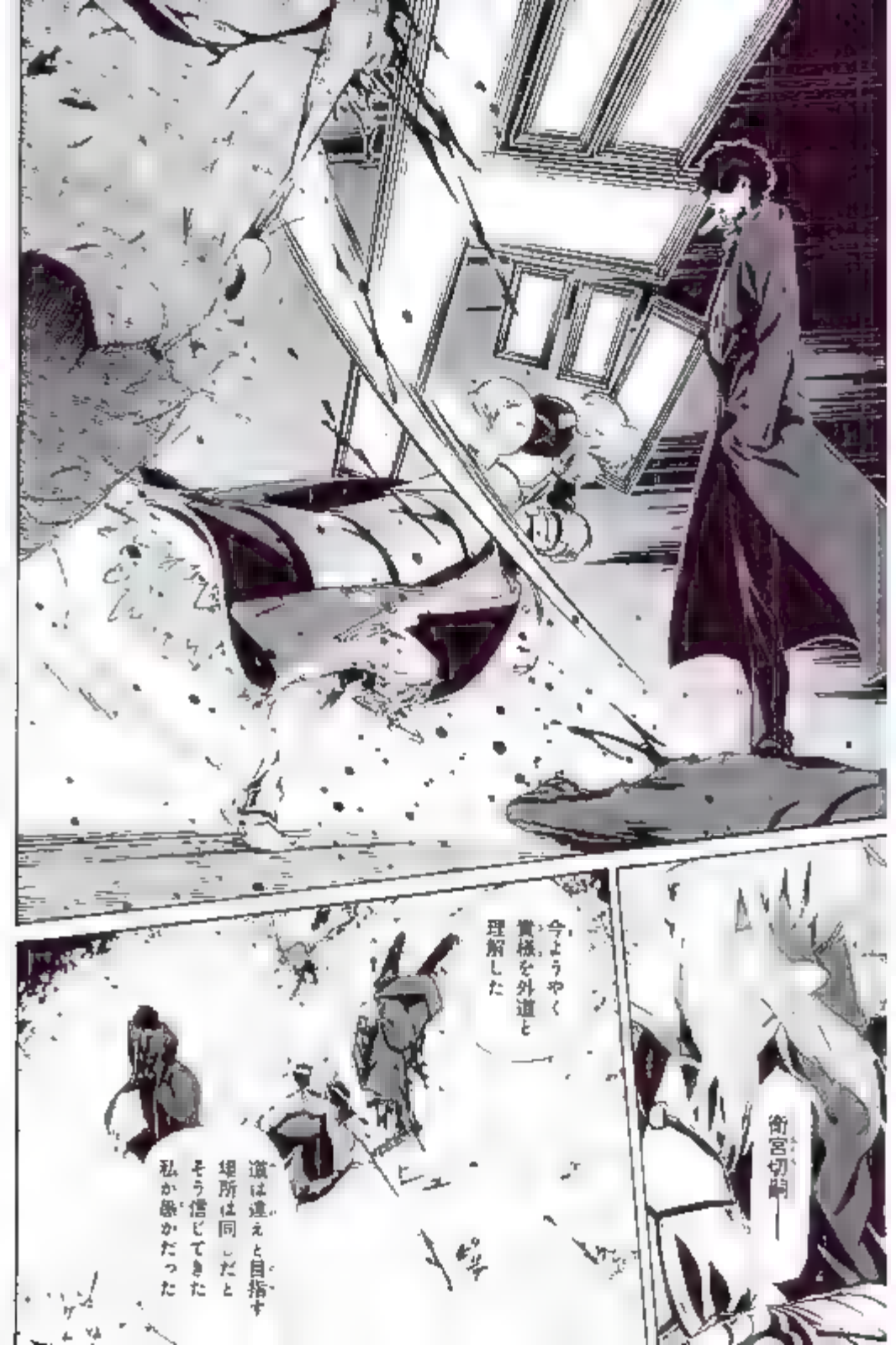
いつか地獄の底に
落ちながらこの
ディムウルフの
恐ろしい声を
聞くだろう
ウオオオ



これで
おまえには強制が
ああ 成立だ
もう僕には
おまえたちを
殺せない



ノラ
あまり
我を
悪いがそれは
出来ない契約だ


衛宮切嗣
今ようやく
貴様を外道と
理解した
道は違えど目指す
場所は同じだと
そう信じてきた
私が愚かだった

私はこれまで
アイリスフィールの
言葉であれば信に足ると
そう思って貴様の性根を
疑うことはしなかった
だが今はもう
貴様のような男が
聖杯を以て救世を成す
などと言われても到底
信じもわけにはいかない
答えろ
切嗣！
貴様は
妻すらも
虚言で踊らせて
きたのか？
万能の願望機を
求める真の
理由は何だ!?

第42話 END

Fate

In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is the cold despair and a so called victory

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always.

It is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost.

least time

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 43 話

たとえ我が剣が
聖杯を勝ち取ったとしても
それを貴様の手に
託す羽目になるのだとしたら私は

答えて 切嗣
いくら何でも
今回はあなたにも
説明の義務があるわ
フッ
そういえば僕の
殺し方を直に
君に見せるのは
これが初めて
だったね アイリ

ねえ切嗣
私ではなく
セイバーに話して
彼女にはあなたの
言葉が必要よ
いいや
そこの
サーヴァント
には話すこと
など何もない
栄光だの名誉だの
そんなものを
嬉々としてもてはやす
殺人者には何を
語り聞かせても無駄だ
騎士なんぞに
世界は救えない
過去の歴史か
そうだったように
今これからも
同じことだ
我が眼前で
騎士道を穢すか
外道ッ！

こいつらはな
戦いの手段に
正邪があると説き
さも戦場に尊いものが
あるかのように
演出してみせる
歴代の英雄どもが
そういう幻想を
売り込んできたせいで
いったいどれだけの
若者たちが武勇だの
名誉だのに誘惑されて
血を流して死んで
いったと思う？

幻想ではない
たとえ命の
遣り取りだろうと
それが人の営みで
ある以上 決して
犯してはならない
法と理念がある
なくては
ならない
さもなくば戦火の度に
この世には地獄が
具現する羽目になる
フン
ほら
これだ

聞いての通りさ
アイリ
この要塞場は
よりいっそよって
戦場か地獄より
マシなものだと
思ってる
冗談じゃない
いつの時代も
あれは
正真正銘の地獄だ
戦場に希望
なんてない
あるのは
掛け値なしの
絶望だけ
敗者の積みの上
しか成り立たない
勝利という名の
罪科だけが
その場に立ち会った
すべての人間は
戦争という行為の
愚性を愚かしさを
弁解の余地なく
認めなきゃならない
それを憎やみ
最悪の禁忌と
しない限り
地獄は地上に
何度でも蘇る

なのに人類は
どれだけ死体の山を積み上げようと
その真実に気付かない
いつの時代も
勇猛果敢な英雄サマが
華やかな武勇譚で
人々の目を眩ませてきたからだ

血を流すことの
邪悪さを認めようとしない馬鹿どもが
余計な意地を張るせいで!
人間の本質は
石器時代から
一歩も前に
進んじゃいない!!

それじゃあ切嗣
あなたがセイバーに屈辱を与えるのは、英霊に対する憎しみのせい？
まさか
そんな私情は交えないさ
僕は聖杯を勝ち取り世界を救う
そのための戦いに最も相応しい手段で臨んでいるだけだ
今の世界 今の人間の在りようでは
どう避けたところで戦いは避けられない
最後には必要悪としての殺し合いが要求される
だったら最大の効率と最小の浪費で最短のうちに処理をつけるのが最善の方法だ
それを卑劣と罵むなら悪辣と語るなら
——ああ大いに結構だとも
正義で世界は救えない
そんなものに僕はまったく興味ない

だがそれでも
貴方は、
術宮切嗣
かつて貴方が
何に裏切られ
何に絶望した
のかは知らない
だがその怒り
その嘆きは
紛れもなく正義を
求めた者だけが
懐くものだ
切嗣
若き日の本当の貴方は
「正義の味方」に
なりたかったはずだ

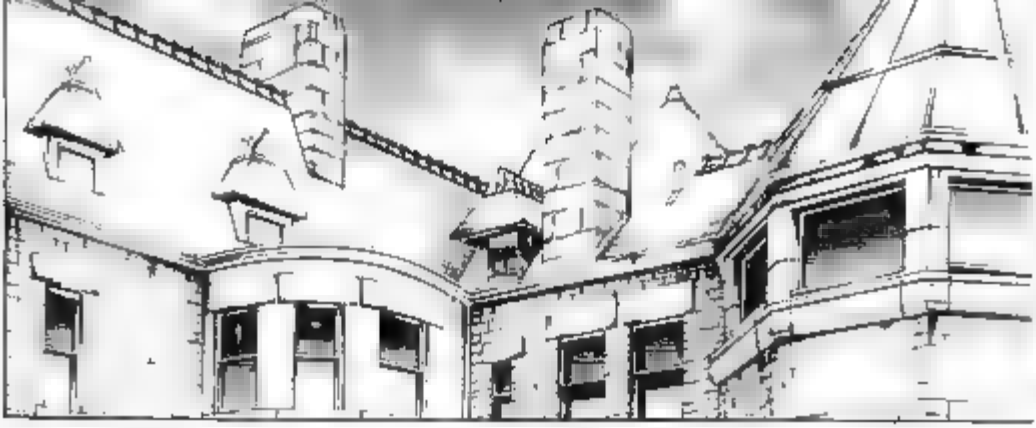
世界を救う英雄を
誰よりも信じて
誰よりも求め
欲していたはずだ
――違うか？

切嗣、
解って
いるのか？

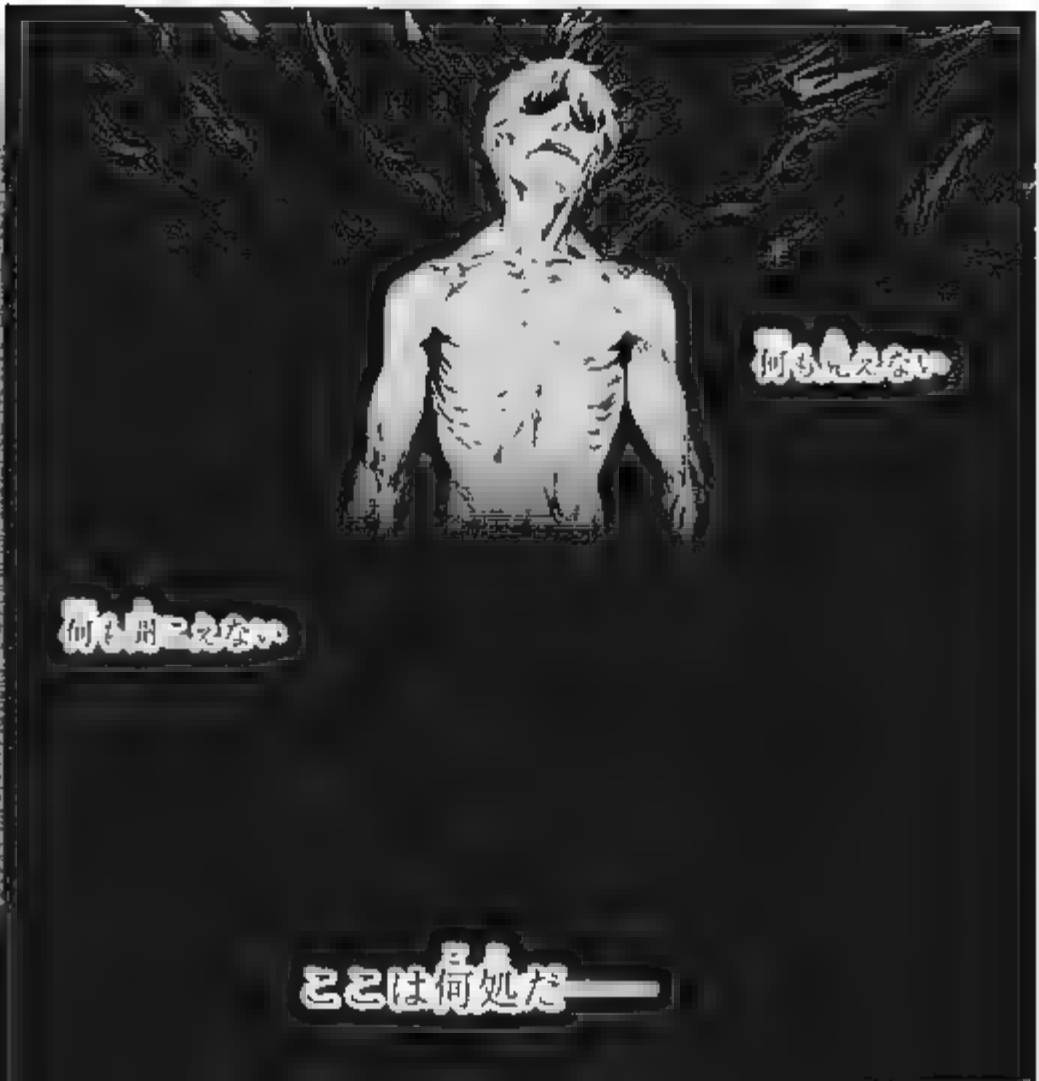
悪を憎んで
悪を為すなら
後に残るのも
悪だけだ
そこから芽吹いた
怒りと憎しみが
また新たな
戦いを呼ぶだろう
終わらぬ連鎖を
終わらせる
それを果たし
得るのか聖杯だ
世界の改変
ヒトの魂の変革を
奇跡を以て
為し遂げる
僕かこの身体で
流す血を
人類最後の流血に
してみせる

そのためにたとえ
この世の全ての悪を
担うことに
なろうとも
構わないさ
それで世界が救えるなら
僕は喜んで引き受ける

切嗣は
もう行ったわね。
アイリスフィール？
アイリスフィールっ
気を確かにッ！



—65 49 08



おまえは誰だ？
嘆かれし者
嘆かれし者
嘆かれし者
嘆かれし者

我が名は貴威に置せず——
我が身は貴置に置せず——
我は共置の誓さが生んだ勝——
我は伝統の勝に生じた勝——
我に我は情置する——

ガッ
ギッ
ガッ
ガッ
ガッ
我は希求する――!!
血に沈みし海の闇をも糧にして
光り輝くあの者たちを呪う――
あの貴様こそ我が呪縛――!!
その呪縛が不朽であるが故
我もまた永久に呪われる――

真相就是这——

がぁあああああぁあ!!

まもっと覚醒せ――

嫌だ……
やめてくれ…

助けてくれ!

貴様の生命も
貴様の真理も――

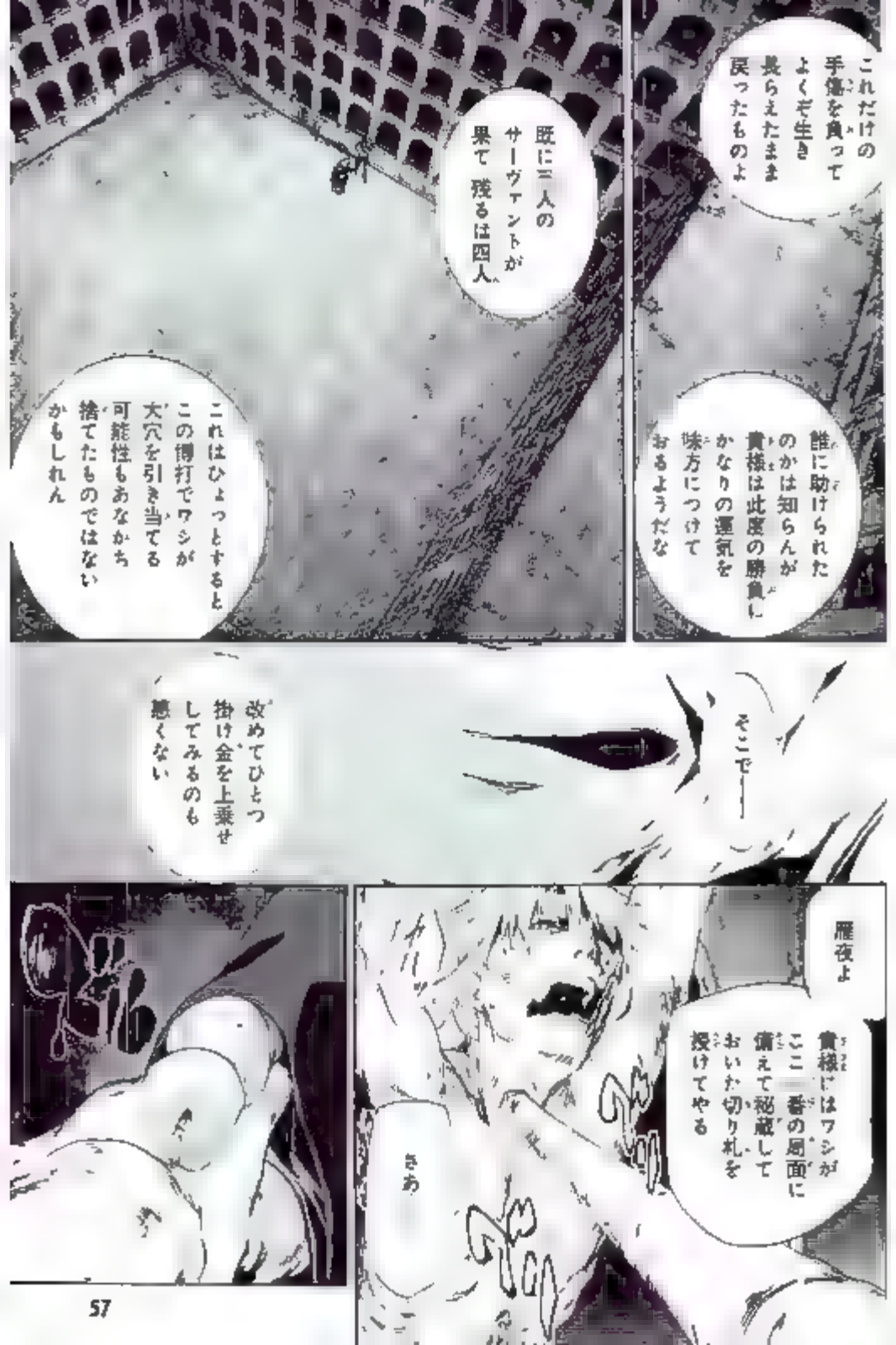
ッぁアアあ……

我が憎しみを覚醒
させるために――ッ!!

あぁアあああアア!!

面生
面生ッ
面生
面生

呵々々
まったく
随分なザマに
成り果てたのう
雁夜よ
勘違いするで
ないぞ
ワシはなにも
責めておる
わけではない


これだけの手傷を負ってよくぞ生き長らえたまま戻ったものよ
誰に助けられたのかは知らんが貴様は此度の勝負しかなりの運気を味方につけておるようだな
既に二人のサーヴァントが果て 残るは四人
これはひょっとするとこの博打でワシが大穴を引き当てる可能性もあながち捨てたものではないかもしれん
そこで――
改めてひとつ掛け金を上乗せしてみるのも悪くない
雁夜よ
貴様にはワシがここ一番の局面に備えて秘蔵しておいた切り札を授けてやる
さあ

あか

ぐぁぁぁあッ……
があぁッ!?
呵々々ッ
飛面じゃのう
いま貴様に
呑ませた淫虫は
桜の純潔を最初に
吸った 匹よ
どうだ雁夜よ
この一年 しっくりと
喰らいに喰らった
娘の精気――
極上の魔力
であろう

あああああ
ああああ！！
呵々々ッ
呵々々々々ッ

さあ戦うがいい雁夜
桜から奪ったその生命
存分に燃やし尽くせ
ゴゴゴゴ
ガガガガ
ガガガガ
血肉も骨も
残さず貴やして
聖杯を掴むがいい
貴様ごときに
出来るもの
ならなァ！
ガァ…ァ
ハァ…ハァ

第43話 END

Fate

In the battleground there is no place for hope.

What lies here is just cold despair and a so-called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

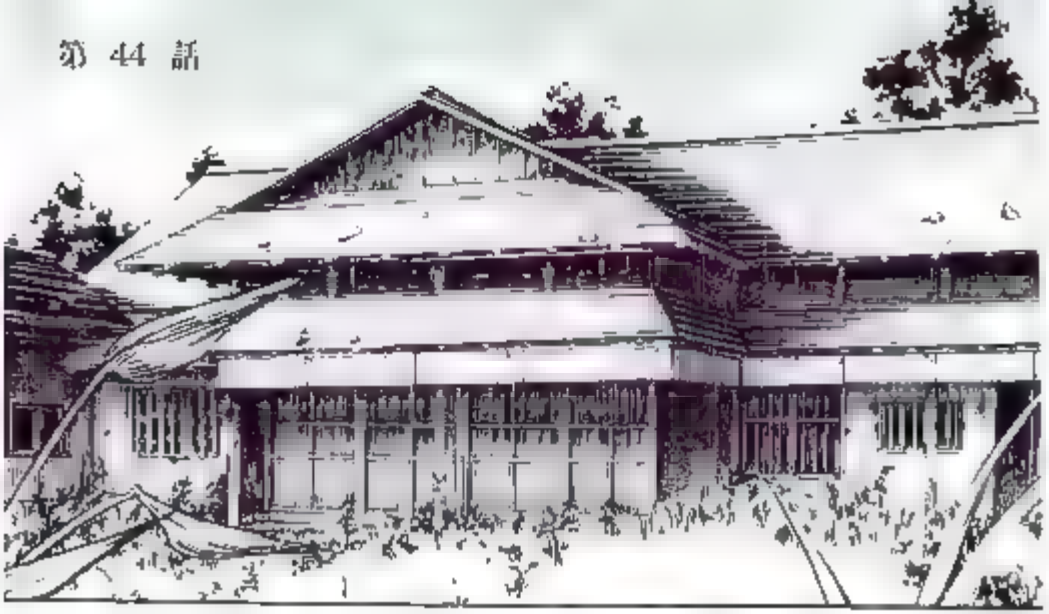
and at the least cost

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 44 話



64:21.13

第 44 話

ん
セイバー
アイリスフィール
具合はどうですか？
ええ
うん
もう大丈夫
みたい
どうやら心配
させてしまった
みたいね
御免なさい
い、いえ
本当に大丈夫であれば
それに越したことは
ないのですが
しかし
どうやら私
ここにきて色々と
問題があるみたい
ええ あなたの
言いたい事は
解るわ セイバー

こうやって
安静にしていれば
平気だけれど
もうこの先は
あなたの隣で
サポートを続けるのは
無理かもしれない
アイリス
フィール
御免なさいね
不甲斐ないとは
思うんだけれど
あなたの足手まとい
になるよりは
いや
そうではない
むしろ自重して
くださったのは
助かります
私はてっきり貴女が
無理を押すのを諫め
なければならない
のかと身構えていた
もので
そういう心配は
ご無用よ
私たち
ホムンクルスは
人間と違ってね
ちゃんと自分の
身体の構造を把握
してるんだから
燃料切れのランプが
灯るのを無理して
隠そうとするような
自動車があったら
そんなのは正真正銘の
故障でしょう?

たしかに貴女は
事実として人造の
存在かもしれないが
私はそれを普通の
人間と区別して
考えることは
決してしない
だからとうか貴女も
必要以上に自分を
卑下するような
言い方はやめてほしい
優しい
わね
セイバーは
貴女という人に
触れた者ならば
誰もかそう思って
当然です
貴女はひときわ
以上に魅力的な
人柄の持ち主だ
女性であれば
往々にして
体調の不如意か
あるのは当然です
養生に
気兼ねなと
いらない
それを言ったら
あなただって
女の子でしょうに
——その色々と大変
だったんしゃないの？
ずっと男のふりをして
なきゃならなかった頃は

いや それか
ですね
ご存しかもしれませんが
生前の私はとある宝具の
加護を受けていまして
無病息災どころか
老化さえ止まり
こと体調においては
ありとあらゆる
不都合から解放
された身でした
一年経っても
姿形は見ての通り
の有様で——
何はともあれ
アイリスフィール
心配することは
何もありません
確かに貴女の
庇護は心強かったが
敵の数も残り少ない
たとえ
私単独であろうと
充分に戦い抜いて
いけるでしょう

セイバー
あなたが本当に
単独でであったなら
私だって心配はしないわ
ねぇ
セイバー！
あなたは
これから先も切嗣を
仲間と思って
戦っていける？
他のマスターたちが
揃って利己的な探求や
欲望ばかりを求めて
いるならば――
聖杯は切嗣の
手に渡るべき
だと考えます
そのための剣と
なることに
私は異存はない

——だが願わくば
"剣"となるのは
私一人であってほしい
もう二度と耐え難い
切嗣に
被なりのやり方で
介入されるのは
マスター自らが手を
汚すまでもなく
サーヴァントである
私か確実に勝利を
勝ち取れるものと
そう切嗣を納得
させられるような
戦いを演じていく
しかないのでしょう
残る
サーヴァントは
三人
私としても
意地に懸けても
負けられない
相手ばかりだ

唯一な勝利という
お前の意味合いそのものが
騎士団の命題
敗北に繋がる
その可能性を
徹底的に排除する
勝利を掴むまで
何度でも
立ち向かう
意気込み
どちらも目指す
ところは同じ
その過程は致命的な
までに違う

聖杯はね
私にとっては
自分自身も同然なの

それを降臨させる
ための「器」を私は
生まれてからずっと
預かってきたから

聞いています
貴女が
ご器の守り手を
務めていることは

だから
私の「宝」はね

どうあっても私の
愛する人たちの手で
受け止めてほしい

夫と――
それからセイバー
あなたにね

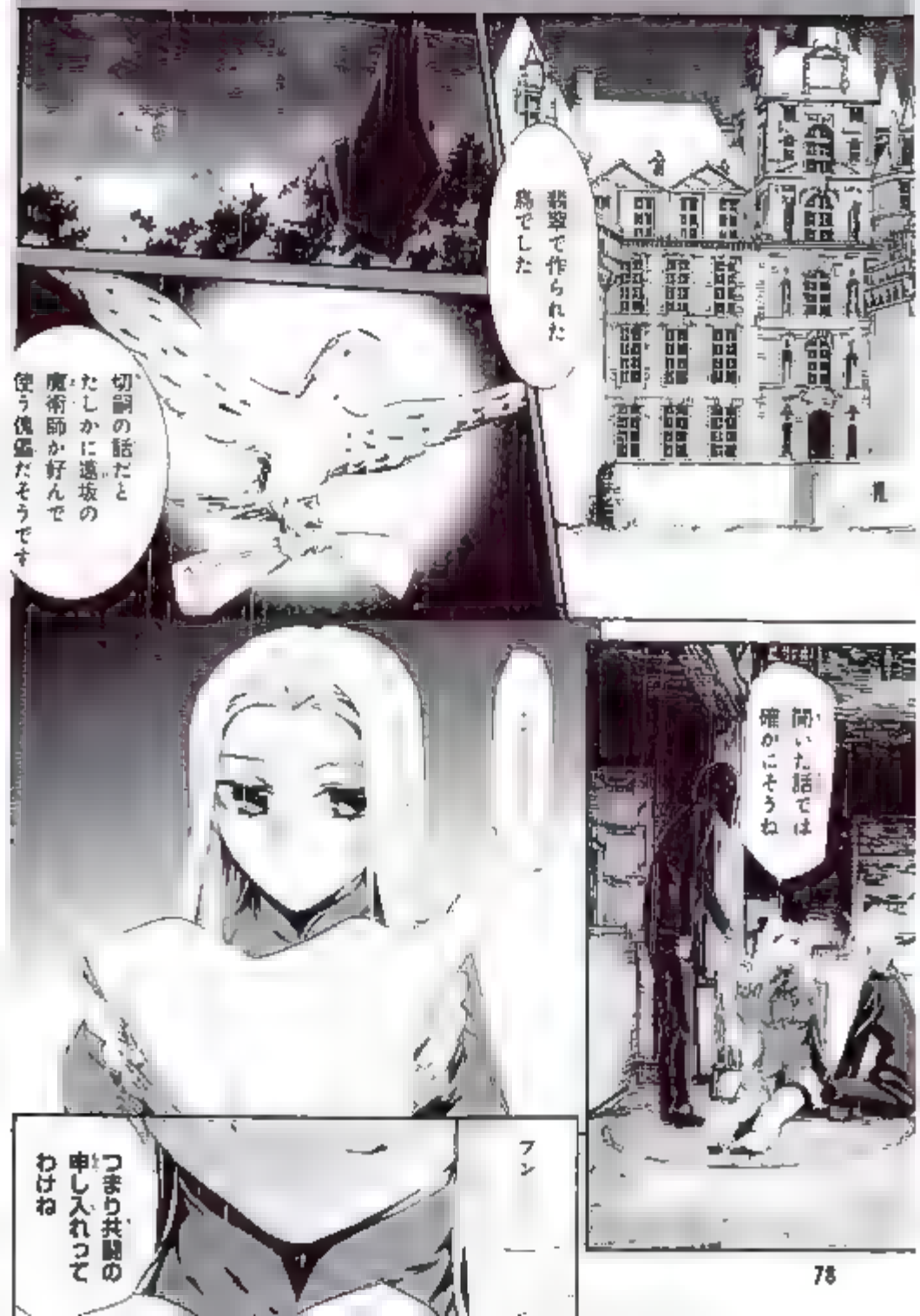
以前 召喚されて
間もない頃にも
言いました

貴女を守り抜き
最後まで勝ち残ると

あの言葉を
違えるつもりは
ありません

けれど
私にはもう——

人の気配が
近づいてきます
アイリスフィール
ああ大丈夫
この気配は
舞弥さんだわ
コン
コン
逢坂時臣より
密使かありました
使い魔
書状を持たせて
マダム
貴女宛のものです
密使？


精霊で作られた鳥でした
切断の話だとたしかに遠坂の魔術師が好んで使う傀儡だそうです
聞いた話では確かにそうね
フン
つまり共闘の申し入れってわけね

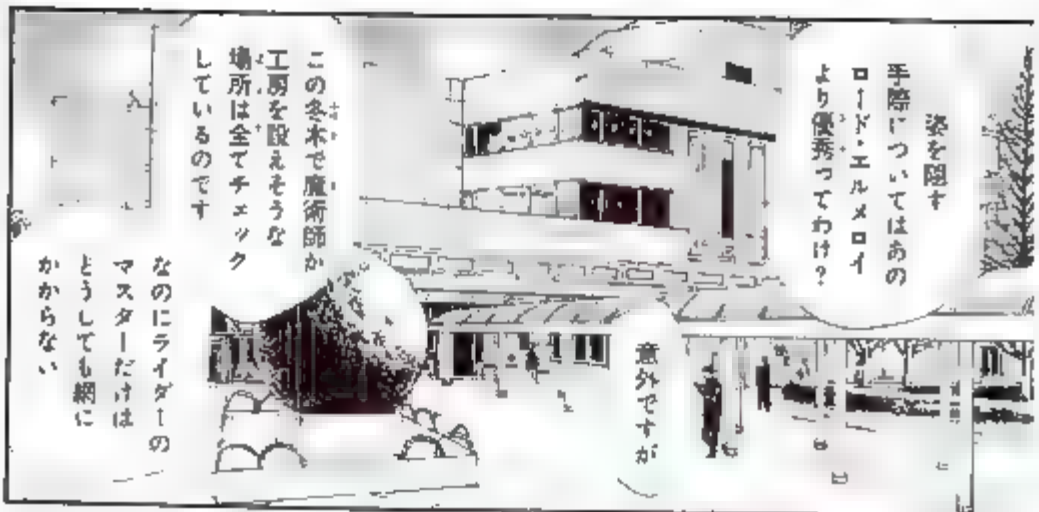
同盟ですか
今になって
そこで一番
与しやすいと
見えた私たちに
誘いをかけてきた
——要するに
他の一組に比べれば
舐められてるってこと
残るライダーと
バーサーカーの対処に
遠坂は不安を
持ってるんでしょうね

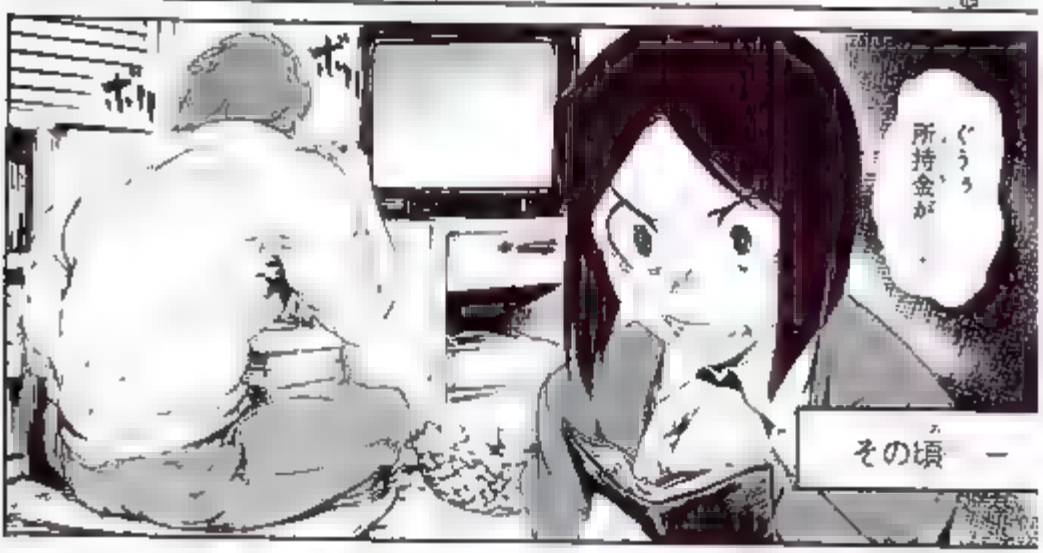
変事に応じる
気があれば
今夜零時に冬木教会で
待っているって
中立を貫くはずの
聖堂教会の監督役が
よくもそんな会見を
許可したものね

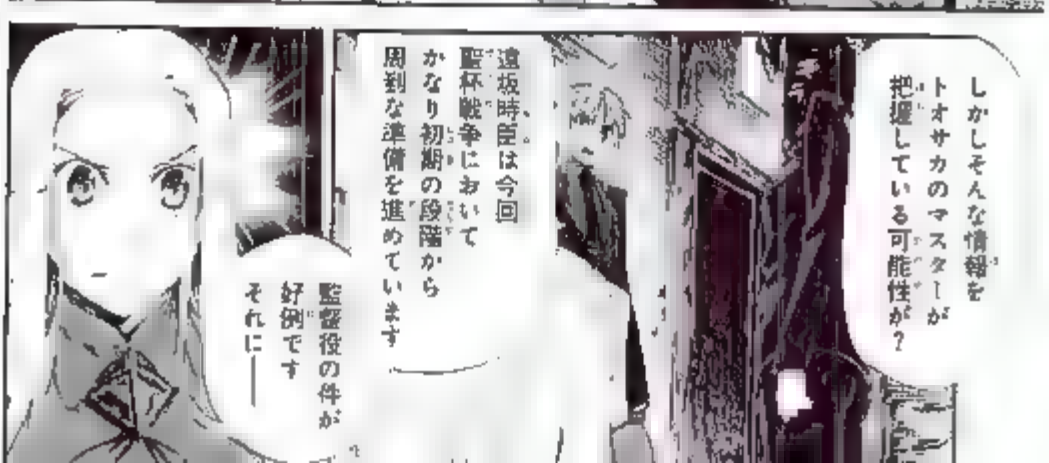
それが既に
監督役の神父は
死亡している
そうです
今の聖杯戦争は
監督役が不在の
状況だとか

切嗣が言っていた
遠坂と教会の繋がりも
これで裏が取れた
ようなものだわ
味方につけていた
監督役が死んで
慌てて策を
講じてるのね
アイリスフィール
相手はあのアーチャーを
従えている魔術師です
信用に足るとは
思えない
今の私は
左手の傷も癒え
万全の状態です
同盟など結ぶ
までもなく
ライダーも
バーサーカーも
私一人で討ち
取って見せる
無論アーチャーとて
例外ではありません

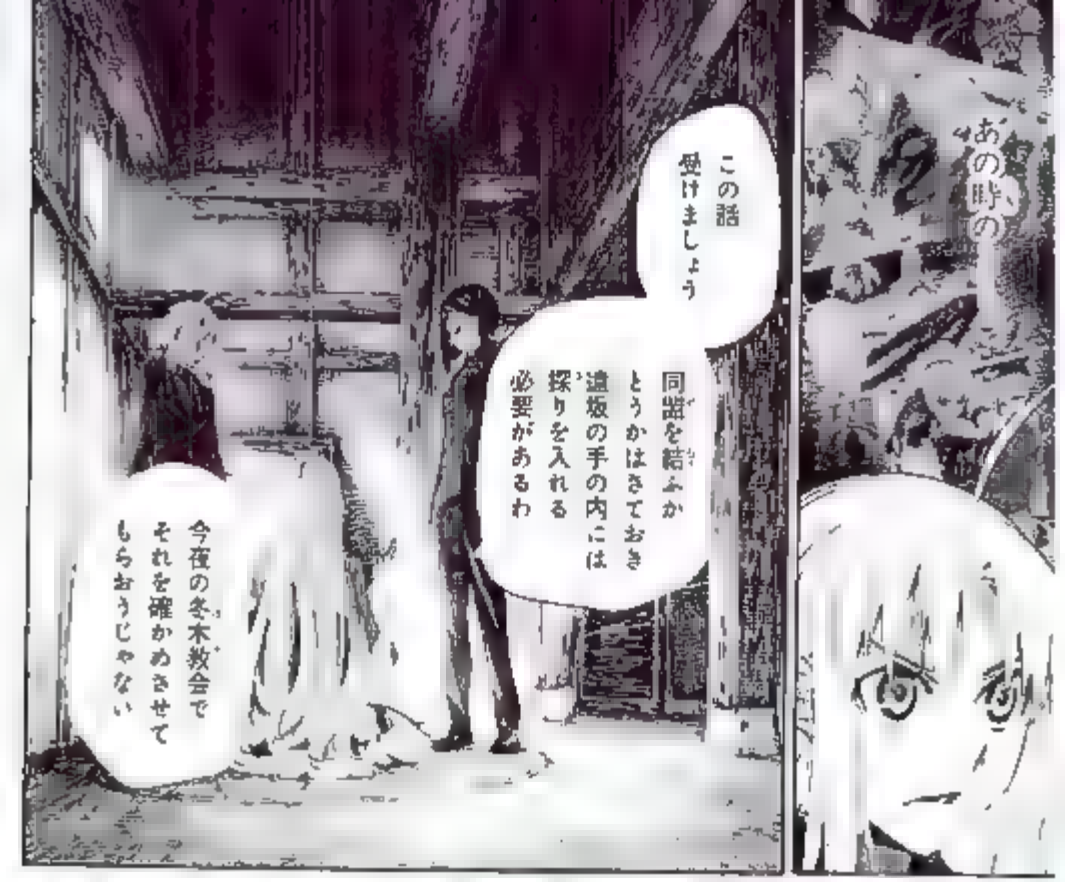
セイバーの言い分も
尤もだけれど
遠坂からまた別の形での
譲歩を引き出す
という手もあるわ
相手にあって
私たちにはない
もの――
たとえば情報とかね
確かに
もし仮に遠坂が
ライダーの陣営の拠点を
掴んでいるのであれば
それを餌にしてでも
聞き出す価値があります
相変わらず
掴めて
いないの？
ライダーと
そのマスターは常に
高速の飛行宝具で
姿を現すので
陸路から後を追うのは
不可能なのです
あんな子供に
切嗣が手を
焼くなんて
私の魔眼も
あのスピードには
とても追いつけず
追跡は失敗して
ばかりです


姿を隠す
手際についてはあの
ロード・エルメロイ
より優秀ってわけ？
意外ですが
この冬木で魔術師が
工房を設えそうな
場所は全てチェック
しているのです
なのにライダーの
マスターだけは
どうしても網に
かからない


ぐうう
所持金が
その頃 ―


しかしそんな情報を
トオサカのマスターが
把握している可能性が？
遠坂時臣は今回
聖杯戦争において
かなり初期の段階から
周到な準備を進めています
監督役の件が
好例です
それに――

――それ―遠坂は
アサシンのマスターを
裏で操っていたと
思われる節がある
あの男か
言峰綺礼に対して
影響力を及ぼしうる
立場にいるのなら
今回の誘いは
無視できないかと
コトミネ…？
憶えておいて
セイバー
今回の聖杯戦争で
もし切嗣を負かして
聖杯を獲る者が
いるとしたら
切嗣自身が
そう言っていた
それが言峰綺礼
という男…
彼は事の始まりから
この綺礼という男を
天敵としてマーク
していたの


あの時の
この話
受けましょう
同盟を結ぶか
とうかはさておき
遠坂の手の内には
探りを入れる
必要があるわ
今夜の冬木教会で
それを確かめさせて
もらおうじゃない

ところでセイバー
今日はあなたにも
用件が
私に？
はい
あなたか
メルセデスを充分に
乗りこなしている
という話だったので
切嗣の指示で
より市街戦向けの
機動手段を用意
しておきました

是非にも
ふく
ちっ
ぺこ
やべんべんな
小柄な少女しか
見えないが
しん
しん
あれがうつて
戦乱の時代を
"
"
であるとは
!
それは心強い
あの「自動車」よりも
なお戦向きな機械とは
聞いてもない支援です
うず
うず
いま門の外に
停めてあります
使い物に
なるかどうか
確認しておいて
もらえますか?

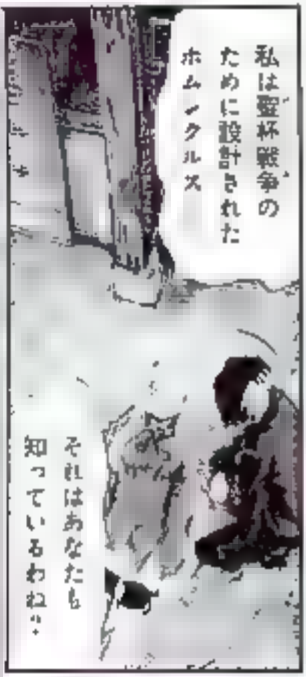
!!
酷い熱……
まマダムっ
どうしました？
バッ

セイバーは
見てないわよね
マダム
貴女の身体に
いったい何か
ウフフ
舞弥さんも
慌てることって
あるのね
……ちょっと
可愛い
馬鹿なことを
それどころ
ではない！
すぐにもセイバーと
それに切嗣を
呼んできます
異常では
ないのよ
これは――予め
決まってたこと
むしろ今まで
ヒトとして機能
できたことの方が
私にとっては奇跡
みたいな幸運だったの

ゴゴゴ
…切嗣も
承知の上なのですか？
だけど…
セイバーには
知られたくないの
彼女は大事な
戦いを控える身
…余計な心配は
…させたくないわ

…私もあまり
立ち入ったことは
知らずにおくべき
でしょうか…
…いいえ
舞弥さん…
あなたにはむしろ
話しておきたいわ
…いい…
…わかりました

今ならセイバーに
聞かれることはない
大丈夫です


私は聖杯戦争のために設計されたホムンクルス
それはあなたも知っているわね

器の守り手——
聖杯を降臨するための依代としての「器」を管理し運搬するっていう私の役目は本当は説明として正しくないわ

はい

前回の聖杯戦争で
アハトのお爺様は
サーヴァント戦に
負けただけでなく
何より重要な
聖杯の器までも
乱戦の中で破壊
されてしまったの
二度目の戦争は勝者か
決まるより先に器が
壊われたことで
無効になってしまった
そのときの
反省を活かして
お爺様は器に
自己管理能力を備えた
ヒトガタの包装を
施すことにしたのよ
それが
私
器そのものに
生存本能を与え
あらゆる危険を
自己回避して聖杯の
完成を成し遂げるため
お爺様は器に
アイリスフィール
という擬装を施したのよ

そんな…
では貴女は
既にサーヴァントは
三人が消滅し
いよいよ戦いは
大詰めになってきた
それに伴って私の中身も
また本来の「器」としての
機能を取り戻すために
余計な外装をとんとん
圧迫しはじめているわけ
これから先私は
さらにヒトガタの
機能を破棄して
もとのモノに
還っていくわ
次はきっと
動けなくなるだろうし
その後はきっと
舞弥さん
こうしてあなたと
話をすることも
できなく
なるでしょう

切嗣はすべて
承知の上
なのですね
今の貴女が
という容態
なのかも
ええ
だからこそ
あの人は私に
セイバーの
鞘を預けたの

全て遠き理想郷

……その効果は知っている？

老衰の停滞と
無制限の治癒能力
——そう聞いています

その効果が
私という「殻」の
崩壊を押し止めて
くれているの

本来ならとっくに
駄目になっている
はずの私がまだ
人間の真似事を
続けていられるのは
そのせい

尤も今みたいに
セイバーとの距離が
離れてしまうと
途端にボロか
出るんだけれど

……

……何故私には
教えたのですか？

久宇舞弥――
あなたなら
決して私を
憐れんだりしない
きっと私を
認めてくれる
思ったから
そう

マダム
私は貴女という女を
もっと遠い存在
だと思っていました
そんなこと…ない
…解ってくれたら
はい
私がこの命に
代えてでも
最後まで貴女を
お守りいたします
だからどうか

第44話　END

Fate

In the battleground, there is no place for hope

What lies there is just cold despair and a so-called victory

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

It is best to end them in the best efficiency

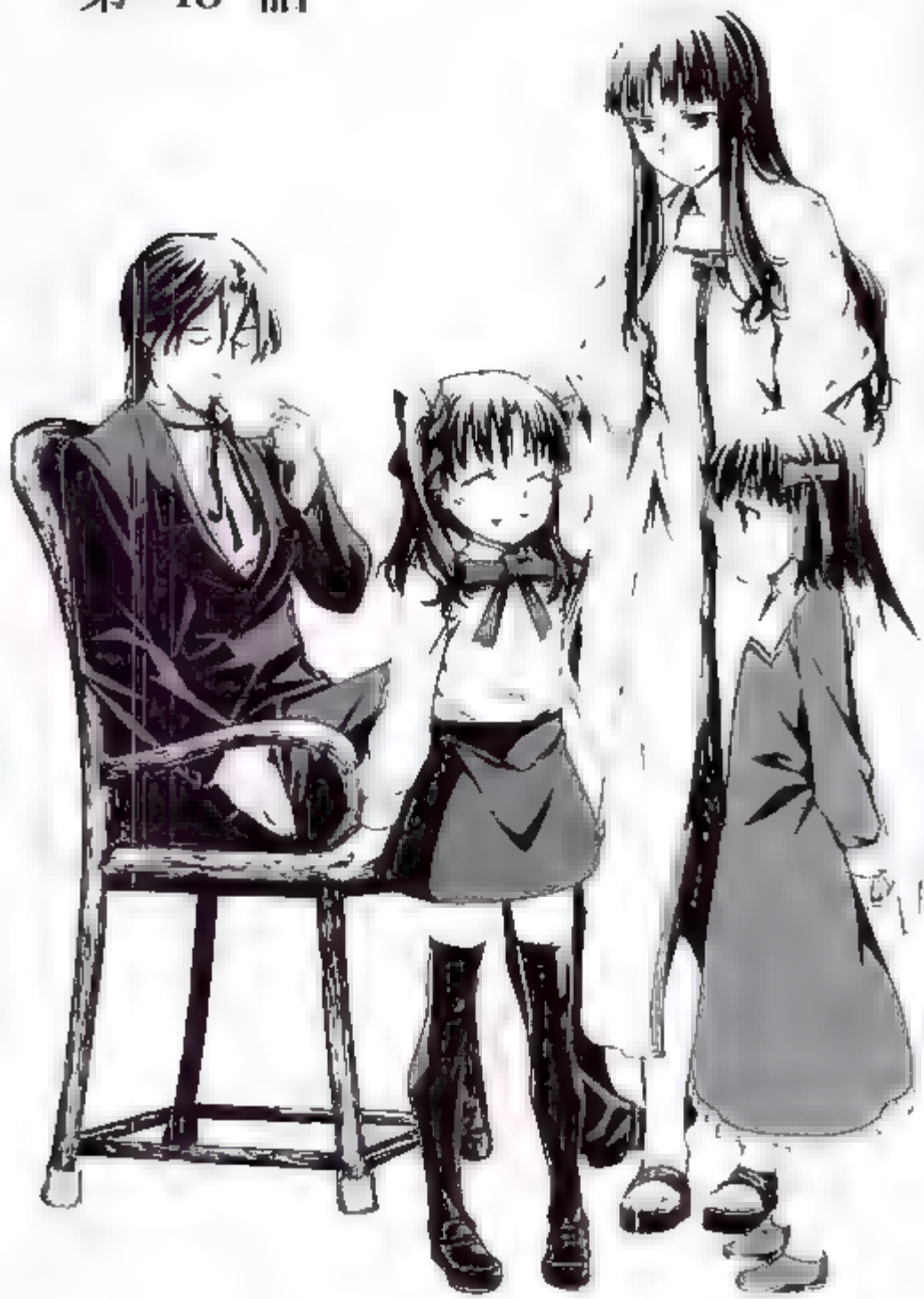
and at the least cost.

least time

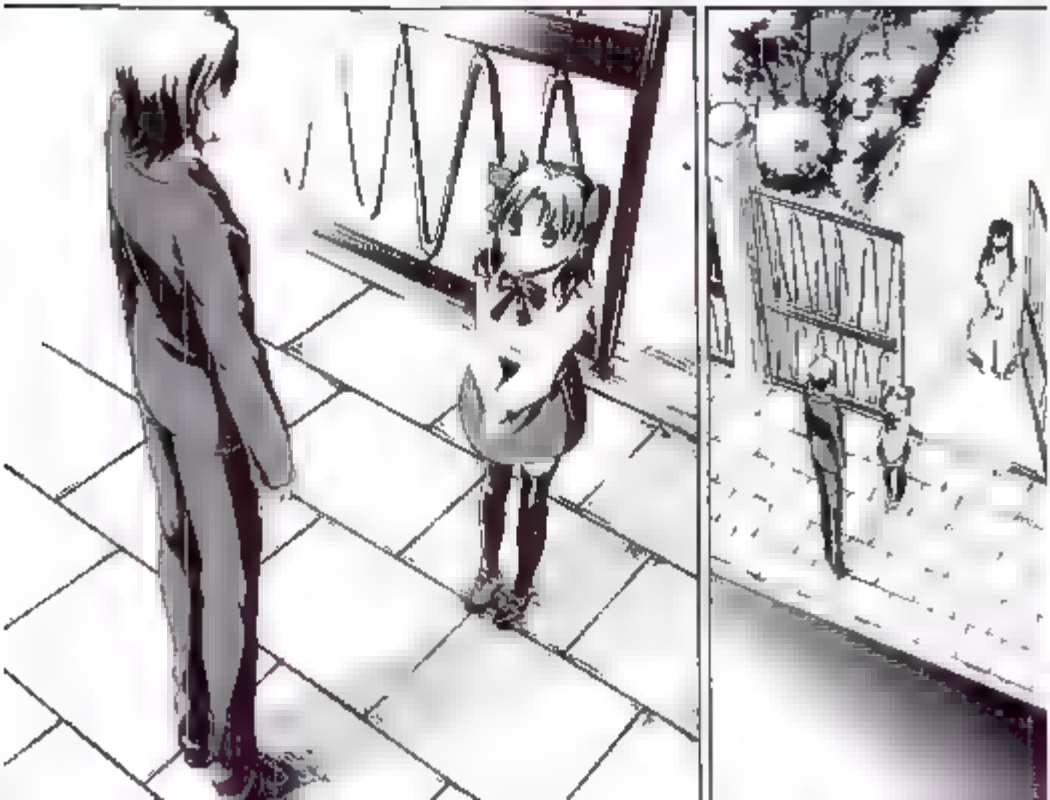
Call it not fun nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 45 話



—62 · 48 35



もし仮に…
これが…
最後の機会
だとしたら
何かしなければ
この女…一生
何も…

こんな風に娘の頭を
撫でてやったことは
一度もなかったな
凛：
成人するまでは
協会に貸しを
作っておけ
それ以後の判断は
おまえに任せる
おまえならば
独りでもやって
いけるだろう

私は決して
天才だった
わけではない

歴代の当主において
もっともその資質は
凡庸であった

私はただ過去の
家訓・思考を
あり続けた
だけのことだ

いかなる時でも
冷静を持ち
沈着たれ

この結果を
求められれば
その指針を種々
それに則り

この徹底した
[illegible]
[illegible]
[illegible]

人もまた環境を
必要としてそれだけ
隔たった者を非と
[illegible]
[illegible]

なかった それ代は
私に魔本刻印を
継承 その刻印
受けて出たため

「家督を闘ぐか否か?」と

未来の魔王となるべき
娘としての教育を
施すためだから
だったという
そこは 闇という
名前すら 無い
暗黒の空間 かあった
今にして思えば
それは私にとって
実父である父からの
最大の贈り物
だったといえる
魔族時代は
自らの意思によって
魔導の道を選んだのだ
この自覚こそが
真の強さを
もたらしてくれた
そんな風に
かつて父から
聞かされたのと
同じ言葉を
自分が娘たちに
だが
それは口にしない

凛には

そして桜には

運命を選択する
余地などそもそも
始まりからなかった

かたや架空元素
五重元合属性

かたや架空元素
五重属性

人か人とも
有限に等しい
希有の資質を持って
生まれてしまった

それは魔性を
引き寄せる
呪いでもある

そんな運命に
対処しうる手段は
一つだけ
条理の外を
歩むこと

すなわち魔導の
道に進むことだけ

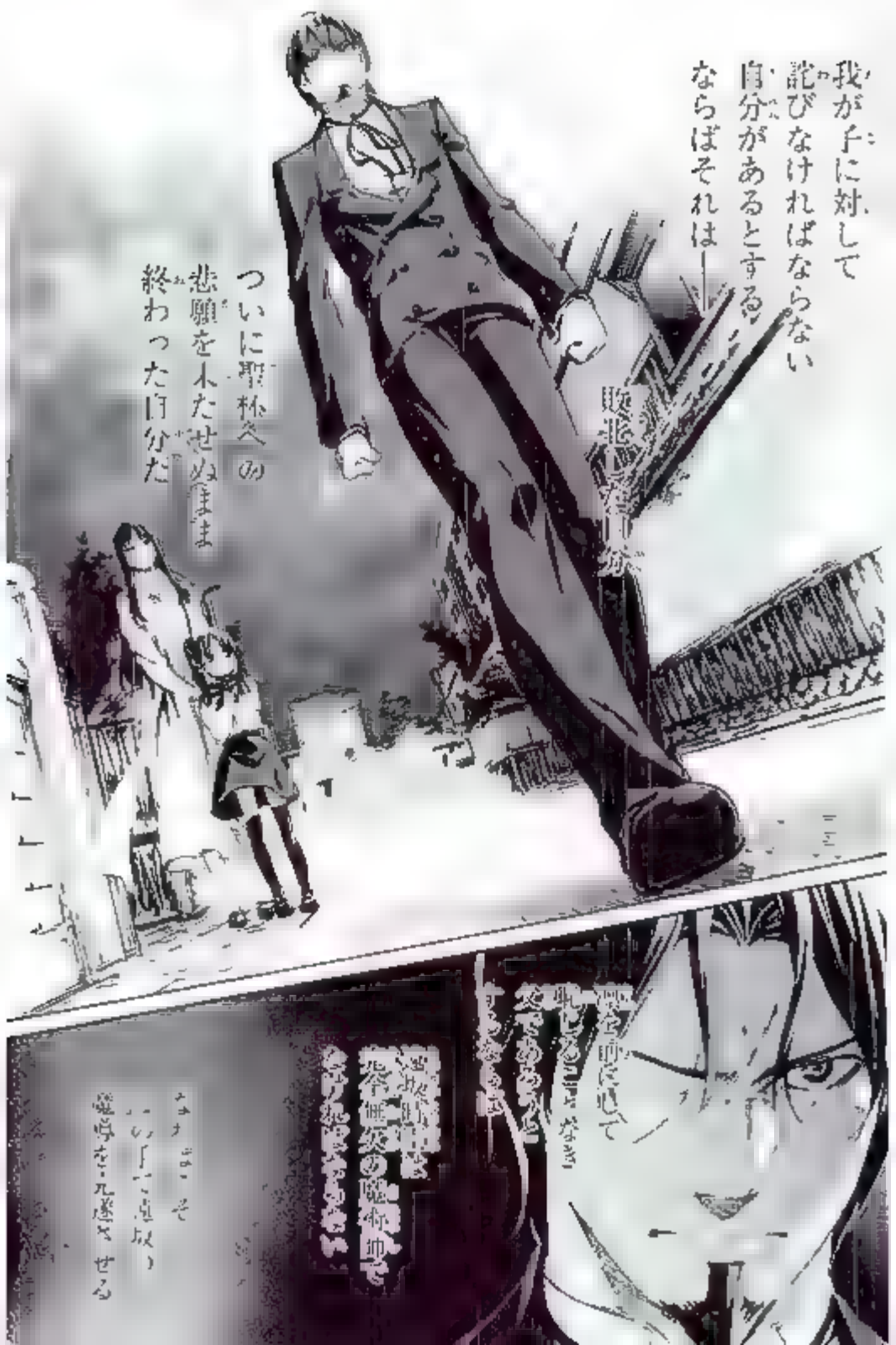
なかなか敗の転生を
なさぬやれるのは
一人のみ
戦争がなくなったとしても
その血 流れぬ
流れぬ経験の数々は
名教師を美化を
もたらすだろう
このフレンツが
どれほど私を
苦しめてきたか
知れない
そんな 殺人を
魔術師会がつくれば
電車土姫さえ
彼女を保護の名の
下にホルマー漬けの
標本にすることだろう
姫はこれに恐れ
魔導を継承し
自らの人生を
切り拓いていく
手段を得た
なかったそ
助けかったよ
希望はまだ
残されていた

その時 こどもは
父より その重責から
解放されたはずだった
一体 何が
本当に
いるのか
解放されるまで
もう全てを
彼の才能は
私より 確かに
容易く 魔導の真理を
極めるだろう
だから 選び取った
道を進むのは
決められた道を
歩むのとは
全く訳が違うのだ
これより 始まる
彼の試練に 何の導きも
与えられぬまま
この娘の前を
なるのだと
それでも私は
父親として
かったと
!

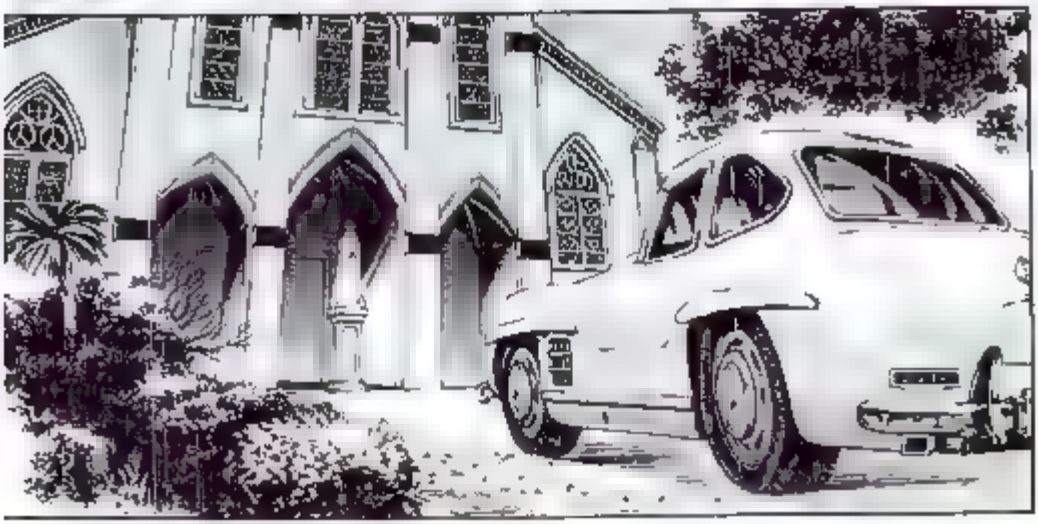
――ああ
これには
驚く
驚も
行くまを案じる
必要もない
奇り高を遠坂の
娘了、かけるべき
千葉よあと
あはない

凛
いずれ聖杯は現れる
アレを手に入れるのは遠坂の義務であり何より――
魔術師であろうとするのなら避けては通れない道だ
ヨット
嗚呼――
かつて私に身が頭首の座を受け継いだ時でさえこれほどの哀れを感じたことはない

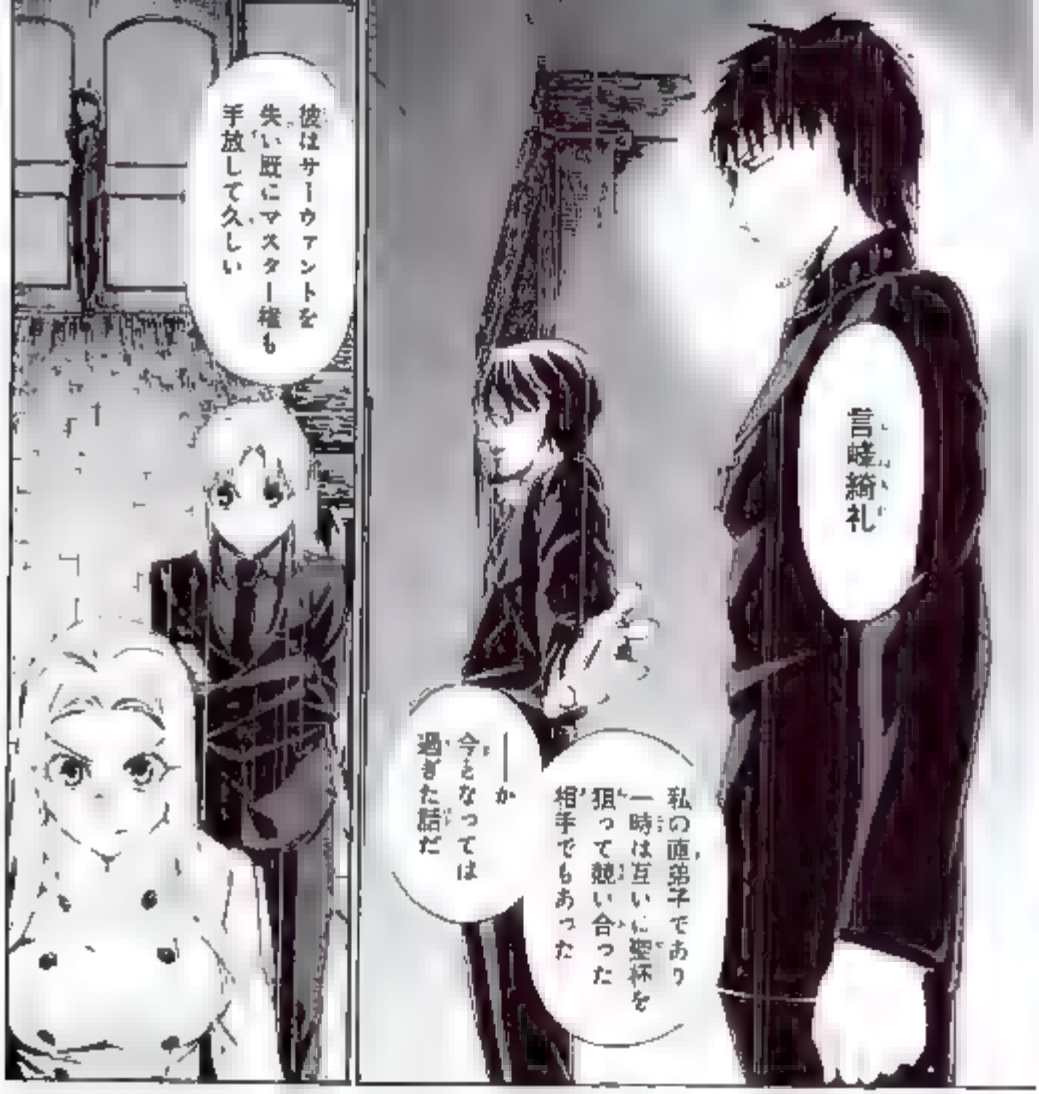
それでは行くが
後の事は
解っているな
はい
行ってらっしゃい
ませ お父様
迷いとは
余計な心から
生まれる影だ
それは
優柔さとは
程遠い
雪の眼差しが
あらためてそう
教えてくれた

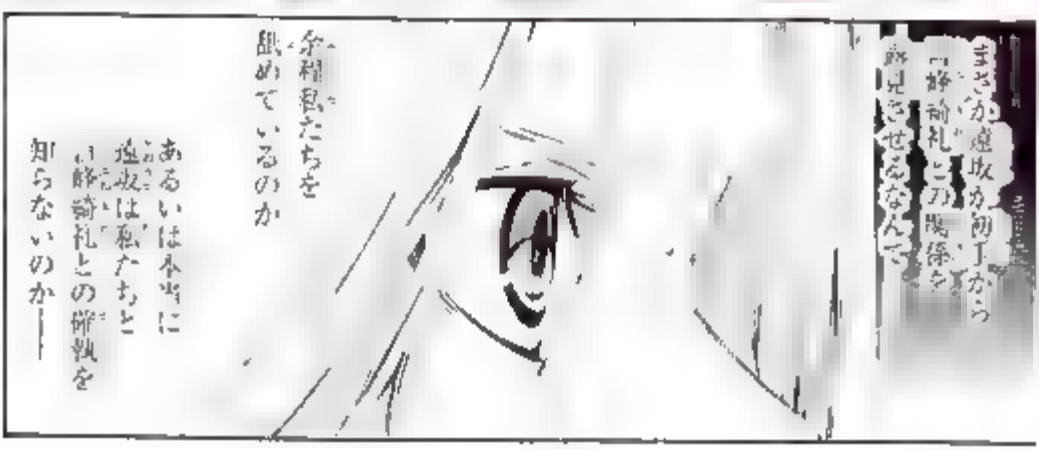

我が子に対して
詫びなければならない
自分があるとするなら
ならばそれは―
ついに聖杯への
悲願を叶たせぬまま
終わった自分だ

愛する娘を
教え導くに相応しい
真に十全たる父となる



—54：06：21


言峰綺礼
私の直弟子であり
一時は互いに聖杯を
狙って競い合った
相手でもあった
——か
今となっては
過ぎた話だ
彼はサーヴァントを
失い既にマスター権も
手放して久しい


まさか遠坂が初手から
「言峰綺礼」と刀関係を
疑わせるなんて
余程私たちを
試めているのか
あるいは本当に
遠坂は私たちと
「言峰綺礼」との確執を
知らないのか——

不肖 この遠坂時臣の
招待に応していただき
まずは感謝の言葉もない
此度の聖杯戦争も
いよいよ大詰めの
局面となってきた
残っているのは
家の定
始まりの御三家の
マスターたちと
飛び入りの外様が一人
さてアインツベルンの
各々方はこの戦局を
どうお考えか？

別段 何とも
我らは最強の
セイバーを統べるが
故に姑息に慢を貪る
必要もなく
ただ当たり前に
勝ち進むまでのこと
フン 成る程
それならば
当方の見解のみ
忌憚なく述べさせて
いただくとしよう
ここは
バーサーカーと
ライダー について
我ら相互の
戦力分析は
まあひとまず
棚に上げるとして
我々としては
当然ながら最終的には
御三家 のみで
聖杯の帰趨を決したい
ところだが
残念ながら
今回の聞捕は
戦略を誤った
脆弱なマスターに
負荷のかかる
サーヴァントを
押しつけ
みすみす自滅を
早めている有様だ
おそらく
勝ち上がって
くるのは
ライダーだろう

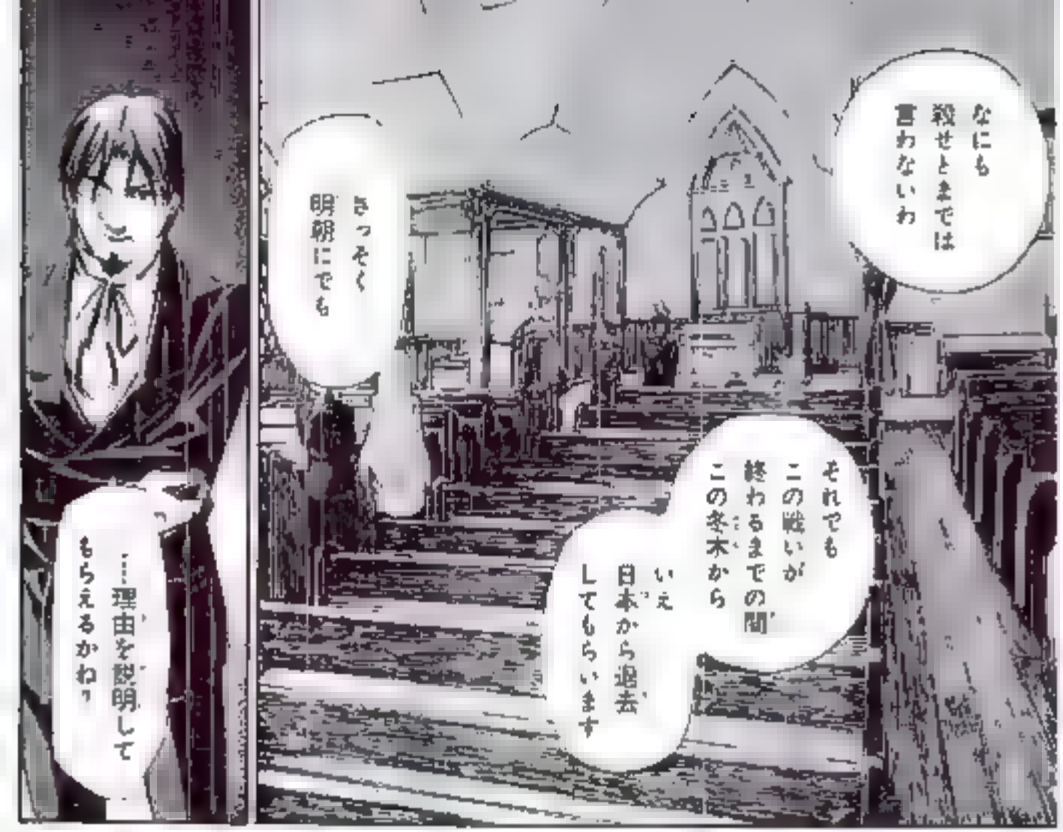
かの英霊イスカンタルの
強力さについては
各々方もご存しかと思う
一
年をかけて
悲願した聖杯に
どこの馬の骨とも
知れぬ新参者が手を
伸ばすというのは
アインツベルンに
とっては殊更に
業腹な流れかと
思うが 如何か？
こと新参という
点においては
トオサカもマキリも
似たようなもの
でしょうに
既にアインツベルンが
願うのは第三魔法の
成就そのものに尽きるはず
ならば今なお「根源」を
目指すこの遠坂時臣に
聖杯を託せば
それでもう充分に
本意に沿うはずだが？
トオサカは
物乞いの
真似事までして
我らから聖杯を
奪いたいと？

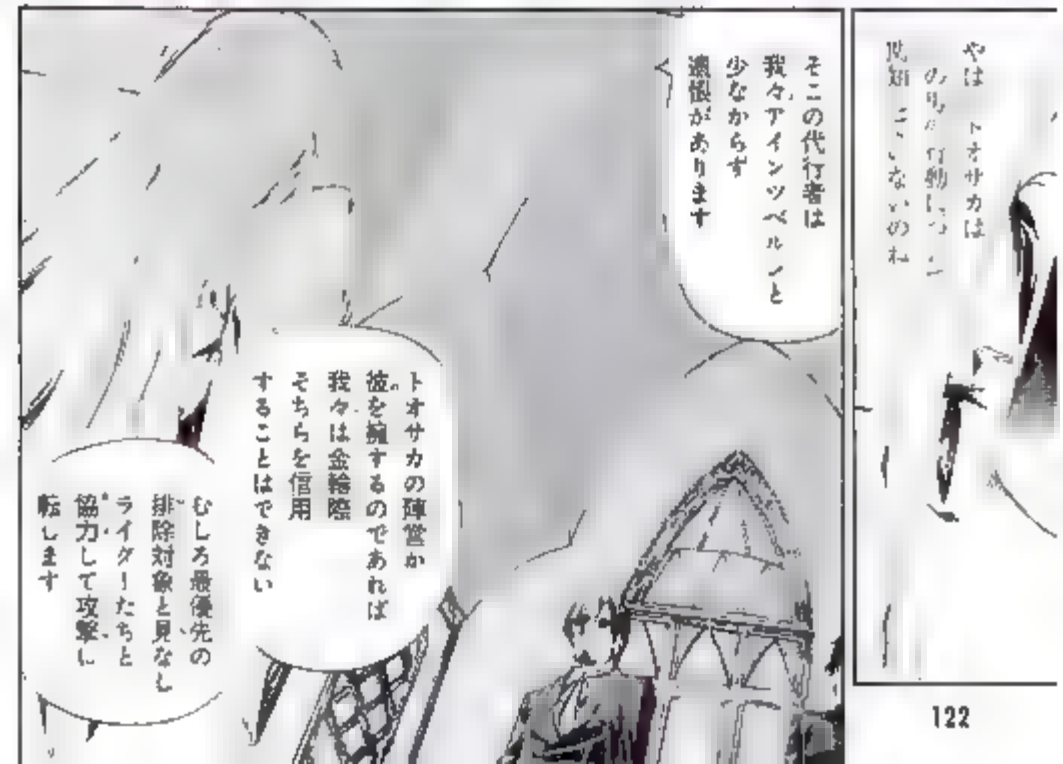
フッ…
聞き手の品性を疑いたくなる解釈がまあ揃いておこう
問題は聖杯についての正しき知識を持ち合わせぬ者が最終戦にまで勝ち残りつつある現状だ
そのような外様の手に聖杯が渡ることは万に一つも許せない
そこのところはお互いに合意できるはずだ
もとより我らアインツベルンは他家と馴れ合うつもりなどなく
問題など笑止千万
ただし敵の対処に序列をつけてほしいというならそちらの誠意次第では考えてもいいでしょう

つまり…
遠坂を敵対者として見なすのは他のマスターを倒した後
——そういう約定なら応じる用意もあります
条件付きの休戦協定——か
落とし所としては妥当だな
こちらの要求は一つ
まず第一にライダーとそのマスターについてそちらが掴んでいる情報をすべて開示すること
猶予お伝えしなさい

ライターのマスターは
ケイネスの門下にいた
見習い魔術師で 名前は
ウェイバー ベルベット
現在は深山町
中越二丁目の
マッケンシーという
老夫婦の家に
寄生している
聖杯戦争とはまったく
無縁な一般家庭だが
ウェイバーの暗示に
よって彼を実の孫だと
思い込まされている
やはりこの男
アサシンを使って
諜報活動を――

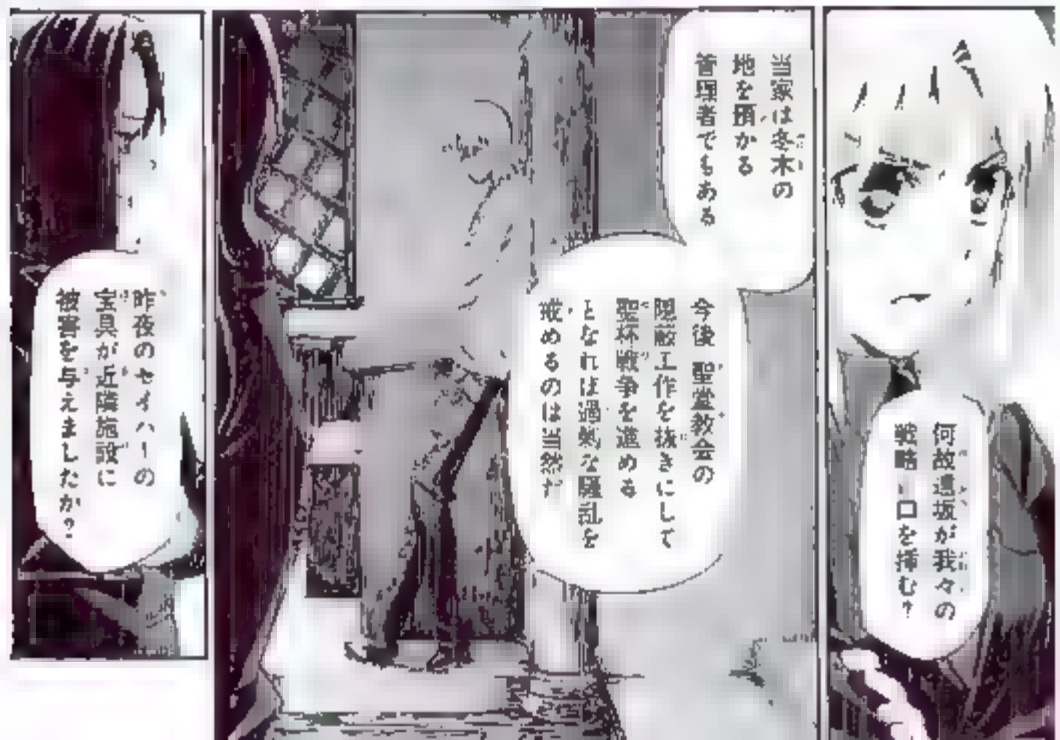
もう一つの条件というのは？
第二の要求は――
言峰綺礼を聖杯戦争から排除すること
……


なにも
殺せとまでは
言わないわ
それでも
この戦いが
終わるまでの間
この冬木から
いえ
日本から退去
してもらいます
きっぱり
明朝にでも
……理由を説明して
もらえるかね


やはり トオサカは
の号令で行動して
いない のね
そこの代行者は
我々アインツベルンと
少なからず
遺恨があります
トオサカの陣営が
彼を殺すのであれば
我々は金輪際
そちらを信用
することはできない
むしろ最優先の
排除対象と見なし
ライダーたちと
協力して攻撃に
転じます

…どういう事かね？綺礼
この綺礼は死んだ璃正神父の代理として監督役の庶務を引き継いでいる
その彼を追放するというのならこちらからもひとつ条件がある

昨夜の戦いで
見せてもらった
そちらのセイバーの
宝具だが――
あまりにも破力が
壊滅的すぎる
今後はその使用に
制限を課したい


何故遠坂が我々の
戦略に口を挟む？
当家は冬木の
地を預かる
管理者でもある
今後 聖堂教会の
隠蔽工作を抜きにして
聖杯戦争を進める
となれば過剰な騒乱を
被るのは当然だ
昨夜のセイバーの
宝具が近隣施設に
被害を与えましたか？

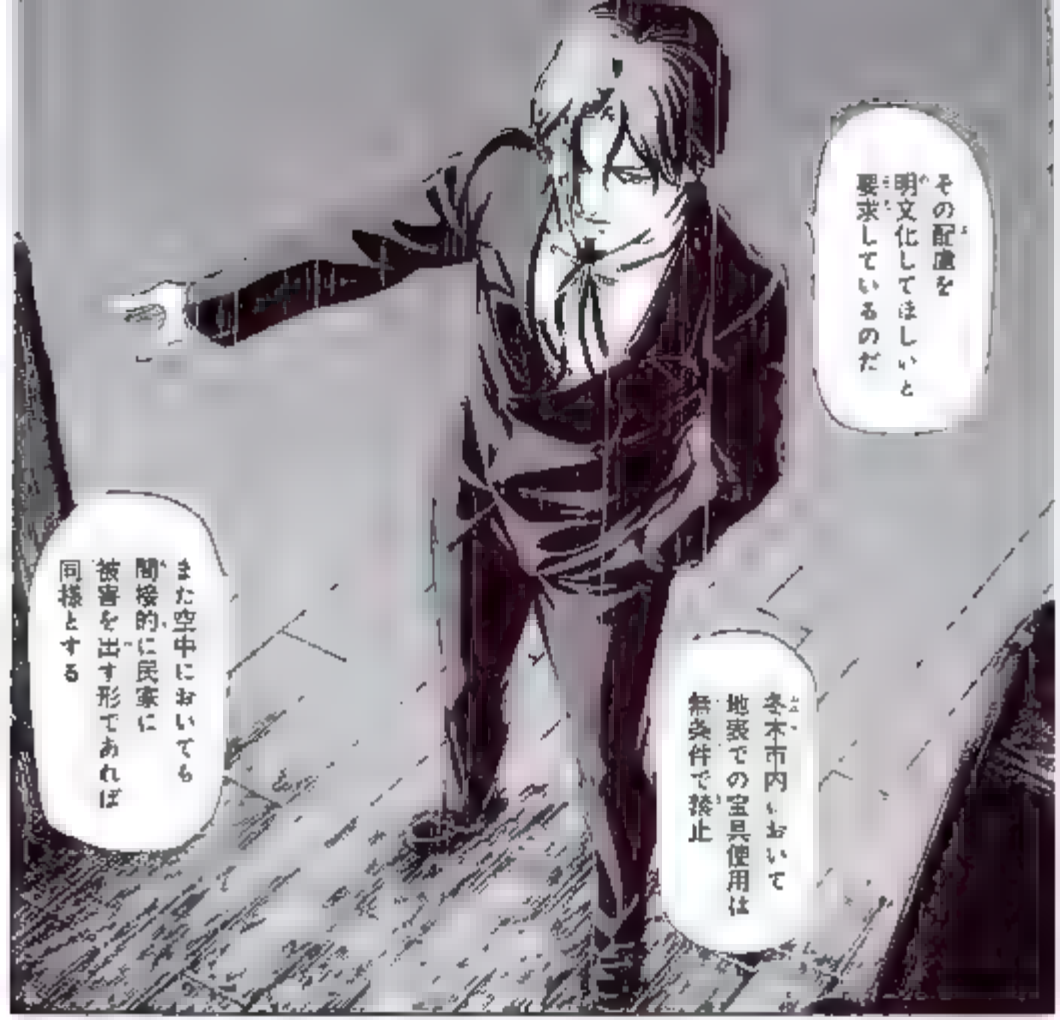
幸いにも射線上に
大型船舶が
あったので
最小限で済んだ

だが一つ間違えば
河岸の民家が一掃
されていたのは確かだ

その船を
配置したのは
我々です

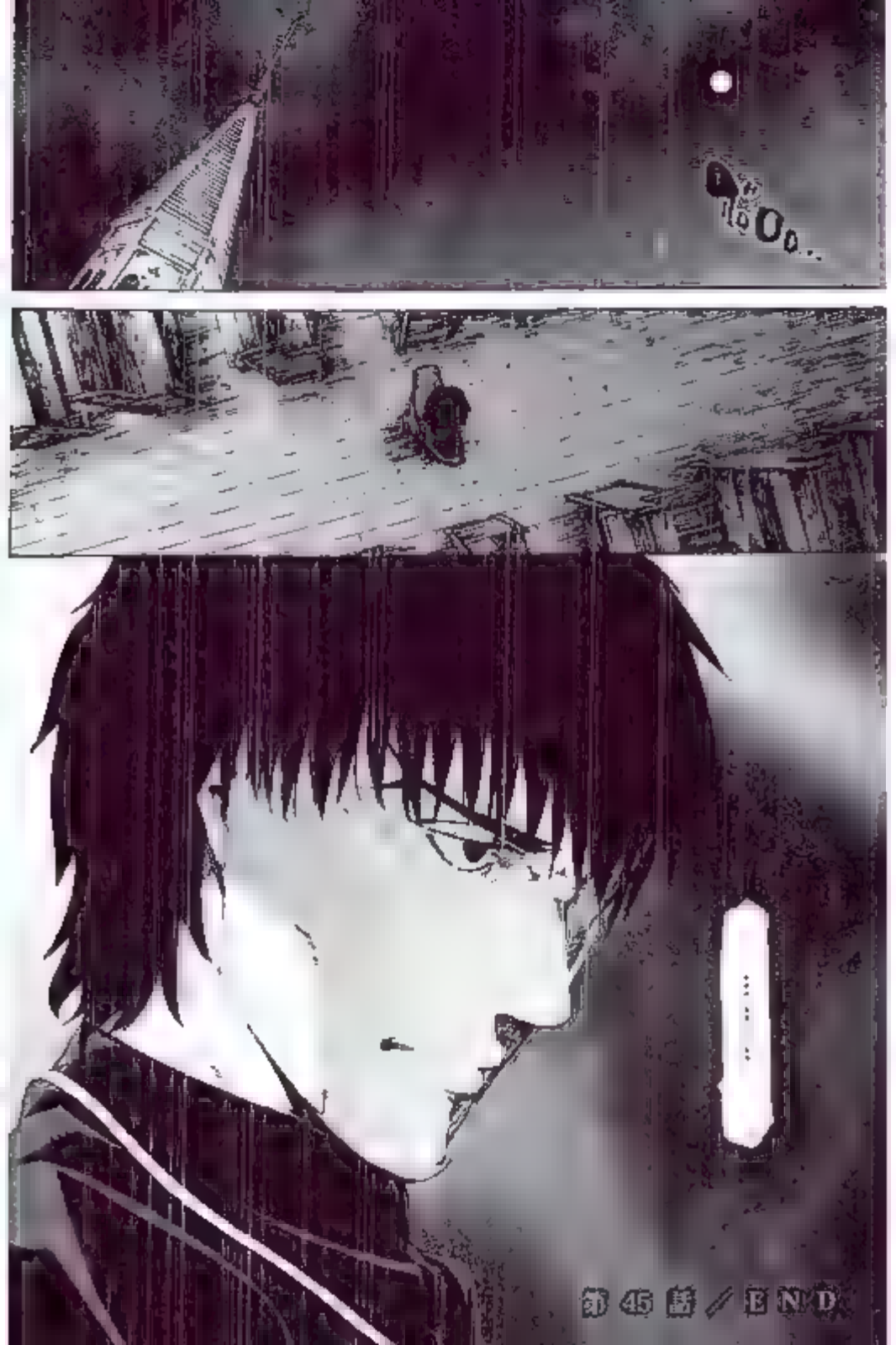
余談ながら
破壊された
船の持ち主にも
保険が下りたことを
確認しています

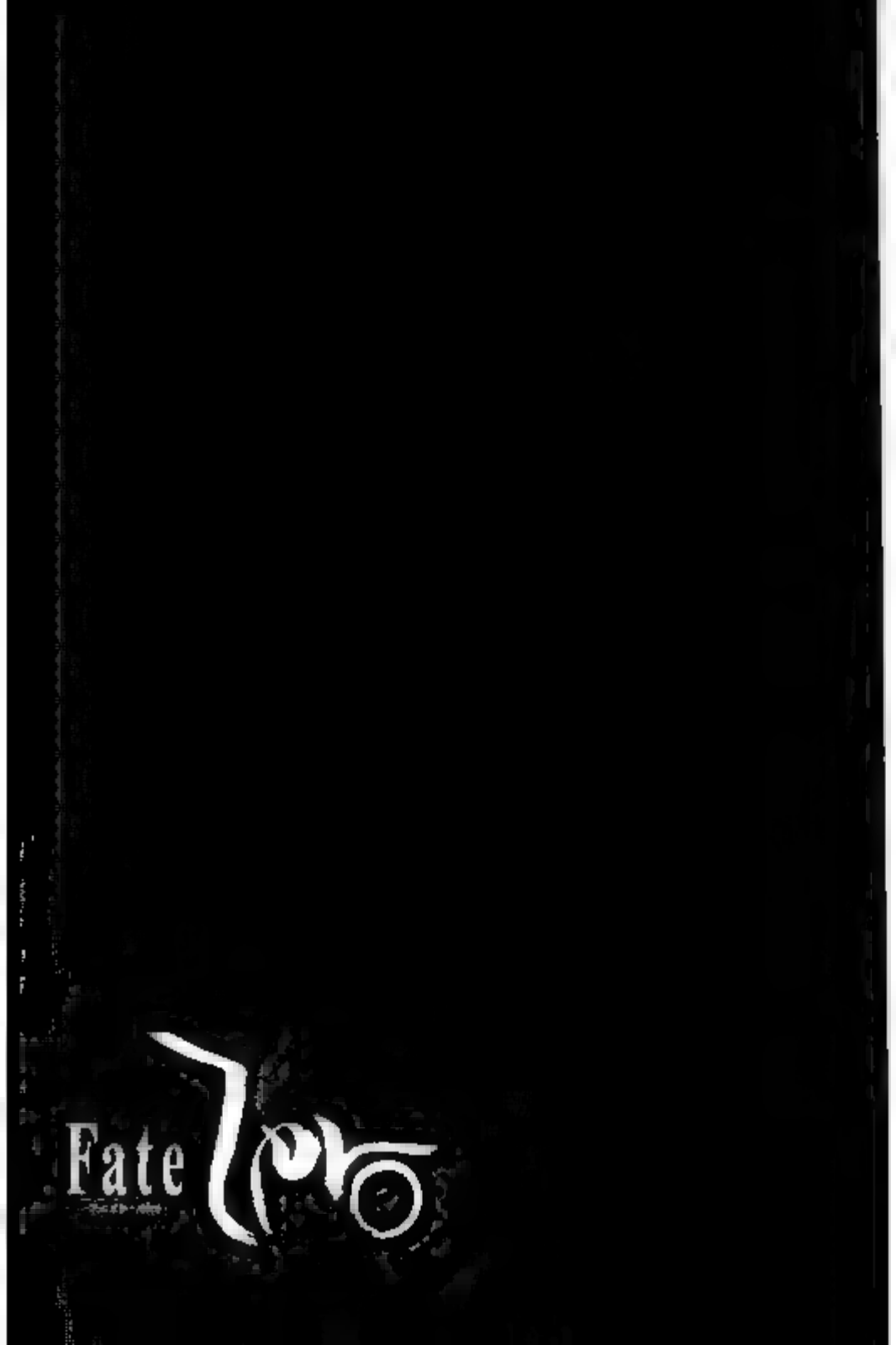
戒められる
までもなく我々は
セイバーの破壊力に
充分な配慮を
払っているのです


その配慮を
明文化してほしいと
要求しているのだ
冬木市内において
地表での宝具使用は
無条件で禁止
また空中においても
間接的に民家に
被害を出す形であれば
同様とする

この条件を
承諾できるか
アインツベルンの
マスターよ
呑めば
間違いなく
宝具級礼を退去
させるのですね？

ああ 私の
責任(せきにん)において
保証する
結構です
それでは条件の
履行を確認した
上で我々は休戦(きゅうせん)に
同意します


Oo..
……
第45話／END


Fate

In the battleground, there is no place for hope

What lies there is just cold despair and a so-called victory

built on the pain of the defeated

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost

least time

Call it no Good nor Bad

Justice cannot save the world It is useless

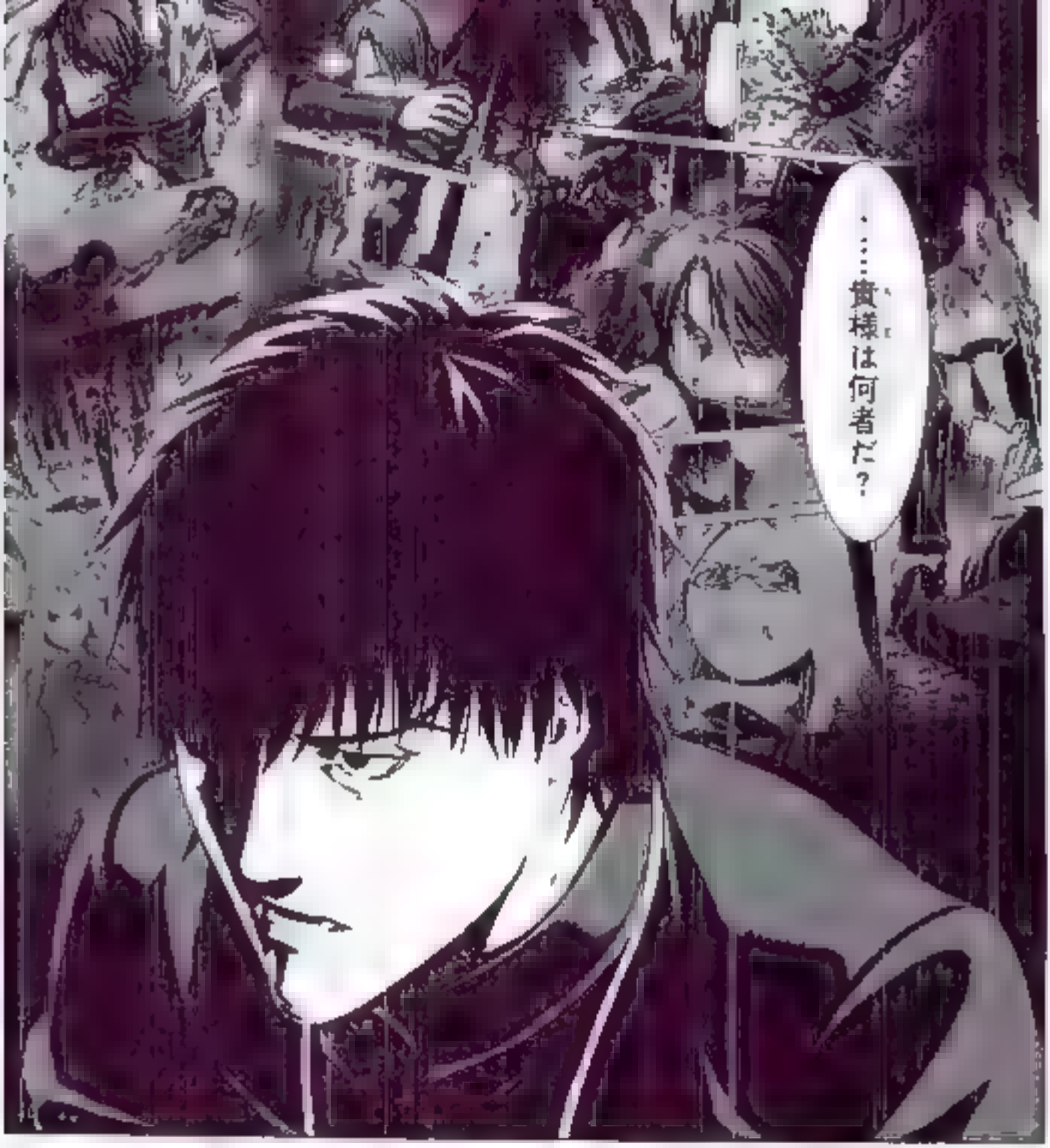
第46話

私は何を
望むのか――？

第七話開――あの冷酷非情なる狩猟機械が
人また一人と獲物を仕留めていく足跡

無駄の無い動作で
手にしたナイフで
あの男は何を
狩るのか。

その疑問は
果たして、私の
命をも脅かす
ものなのか。


……貴様は何者だ？

この期に及んで
まだ思案か？

鈍重にも
程があるぞ
綺礼
……
時臣師を一人で
帰らせたのか
アーチャー
館までは送り
届けてやったさ
ドン
近頃は
アサシンよりも
悪辣な猛獣珠か
夜をうろついて
いるそうだからな
あの男が
先程の会見を
ただ傍観していた
はずはないからな

それにしても
律儀なヤツだ
己を見限った
主君の身をまだ
案じるとはな
あれは
当然の判断だ
そもそも私は
時臣師の道具としての
役割を終えている
既にこの冬木に
留まる理由などない
本気でそう
思っているわけ
ではあるまい？
今なお聖杯は
お前を招いている
そして
お前自身もまた
なお戦い続ける
ことを望んでいる

物心ついて以来
私はただ一つの
探索に生きてきた
ただひたすらに
時を費やし
痛みに耐え
その全てが
徒労に終わった
なのに今，私は
かつてないほどに
〝答え〟を間近に
感じている
きっと私が
問い続けてきたモノは
この冬木での戦いの
果てに――ある

予感がある
そこまで自省しておきながらいったい何をまだ迷う？
全ての答えを知った時この私は破滅することになるのだと
くだらぬ事を考えるなよ綺礼

そんなにも都合良く
生き方を変えられるなら
今日のように悩むお前が
出来上がるわけがない
常に問いながら
生きてきたお前は
最後まで
問いかけながら
死んでいくのだ
答えを
得ぬままでは
安息もないぞ
むしろ
祝うべき
であろう
永きに亘る
お前の巡礼が
ついに目的地に
至るのだ
おまえは
祝福するのか
アーチャー
言ったはずだ
ヒトの業こそ
最高の娯楽だと
お前が持って
生まれた自らの業と
対面する瞬間を
我は心待ちに
しているのだ

フン
そうやって愉悦を
貪ることのみに
執心して生きる
というのはさぞ病快
なのだろうな…
羨むくらいなら
お前もまたそう
生きてみればいい
愉悦の何たるかを
理解できれば
破滅など畏れる
までもなくなるぞ

何だ？
今のは
父の配下だった
聖堂教会の工作員
からの連絡だ
今では全ての連絡は
私に宛てて寄越される
何かよほど心が
浮き立つような
報せでも
受けたのか？
そうかもな
たしかに
決め手にも
なりうる情報
ではあった：
フッ
先の会見の後で
アインツベルンの
連中を尾行させた
生前の父の指示
だと言ったら
疑いもせずに
果たしてくれた
おかげでいま連中が
隠れ潜んでいる
拠点の調べがついた

ハッ
もとより
続ける覚悟
なのではないか！
迷いはしたき
止める手も
あった
ハッハハ
だが結局の
ところ・
なんだ綺礼!!
お前という
ヤツは——ッ！
英雄王
おまえの言うとおり
私という人間は
ただ問い続けることの
他に処方を知らない

父から受け継いだ
伝統ある魔術刻印は
一子相伝の
魔術師の誇りを
継ぐ者にしか
見ることはできない
戦いを終わらせる
力がここにある
消耗しきった
今の私は歴代の刻印を
受け継いだ名門遠坂に
恥ずかしくない
魔術を備え
ているとは
いえない

しかしな 綺礼
きっそくだが
由々しい
問題があるぞ

お前が自らの意思で
聖杯戦争に
参ずるならば
いよいよ遠坂時臣は
敵であろうか
ギリ
つまり今お前は
何の備えもないままに
敵対するサーヴァントと
同室しているのだ

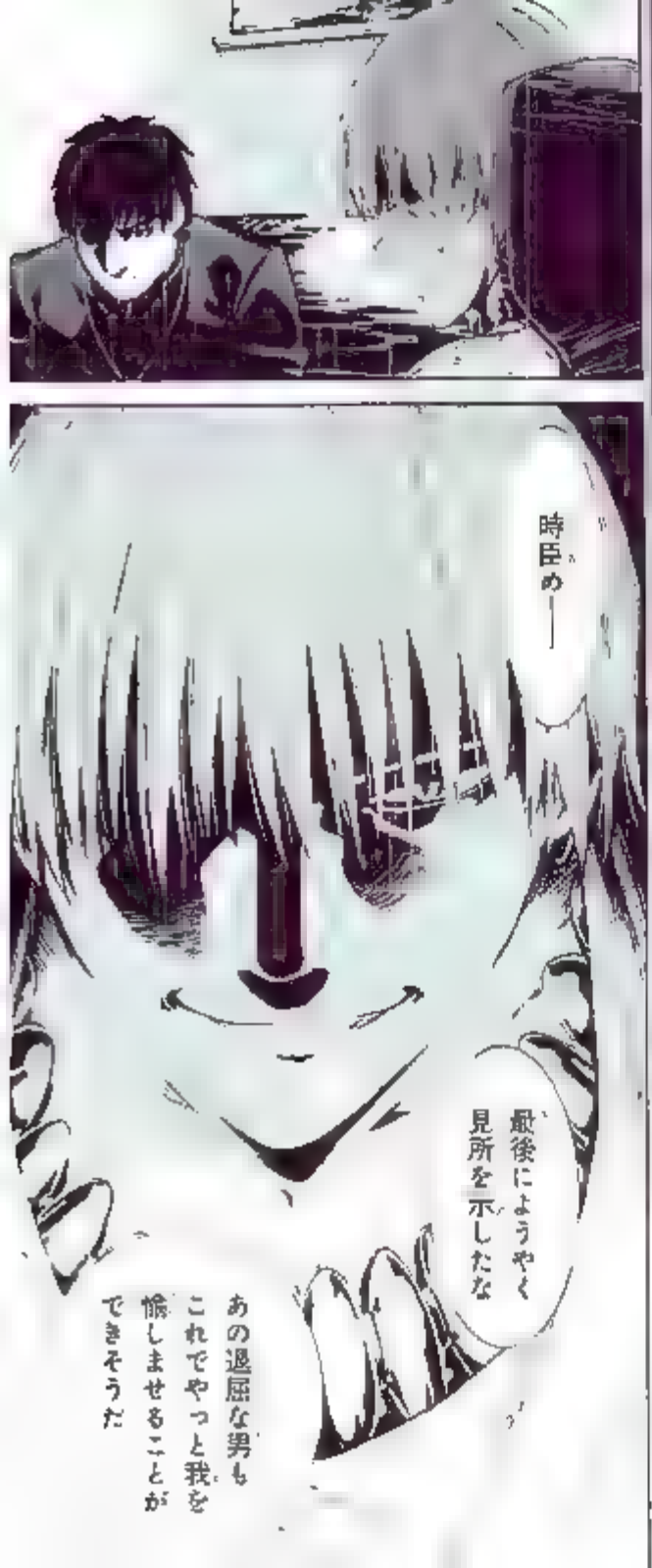
これは大層な
窮地ではないか？
（そうでもない）
命乞いの算段
ぐらいは
ついている
時臣師と
敵対するならば
もうこれ以上
彼の虚言を庇う
必要もない
ギルガメッシュ
まだおまえか知らぬ
聖杯戦争の真実を
教えてやろう
何だとっ

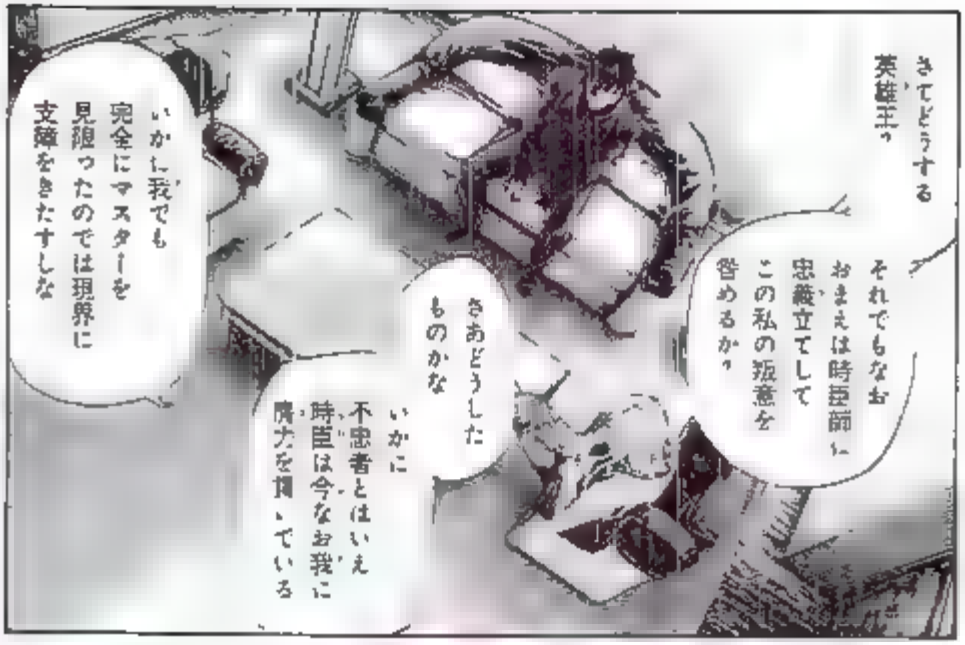
この世の〝内〟に
生じた奇跡か
世界の〝外〟にまで
通じるわけがない
願望機の争奪
などは茶番だ
「始まりの御三家」が
目論んだ聖杯の真意は
他にある
そもそもこの
基本の儀式は
七体の英霊の魂を
束ねて生贄とすることで
「根源」へと至る穴を
空けようとする試みだ

〝奇跡の成就〟
という約束も
英霊を招き寄せる
ための餌でしかない
その〝餌〟に
まつわる風聞だけか
一人歩きした結果
今の聖杯戦争という
形骸だけが残ったのだ
これは
遠坂・間桐
アインツベルン
だけの秘密

今回 かつての
『御三家』の悲願を
正しく成就しようと
している唯一の
魔術師が遠坂時臣だ
時臣師があれほど
令呪の消費を
抑っていた
理由がそれだ
彼は七人の
サーヴァントをすべて
殺し尽くすことで
『大聖杯』を起動させる
七人全てだ
解るな？
彼は他の
マスターたちとの
闘争においては
二画までの令呪
しか使えない
最後に残る一画は
すべての戦いが
終わった後で
自らのサーヴァントを
自決させるために
必要だったからだ

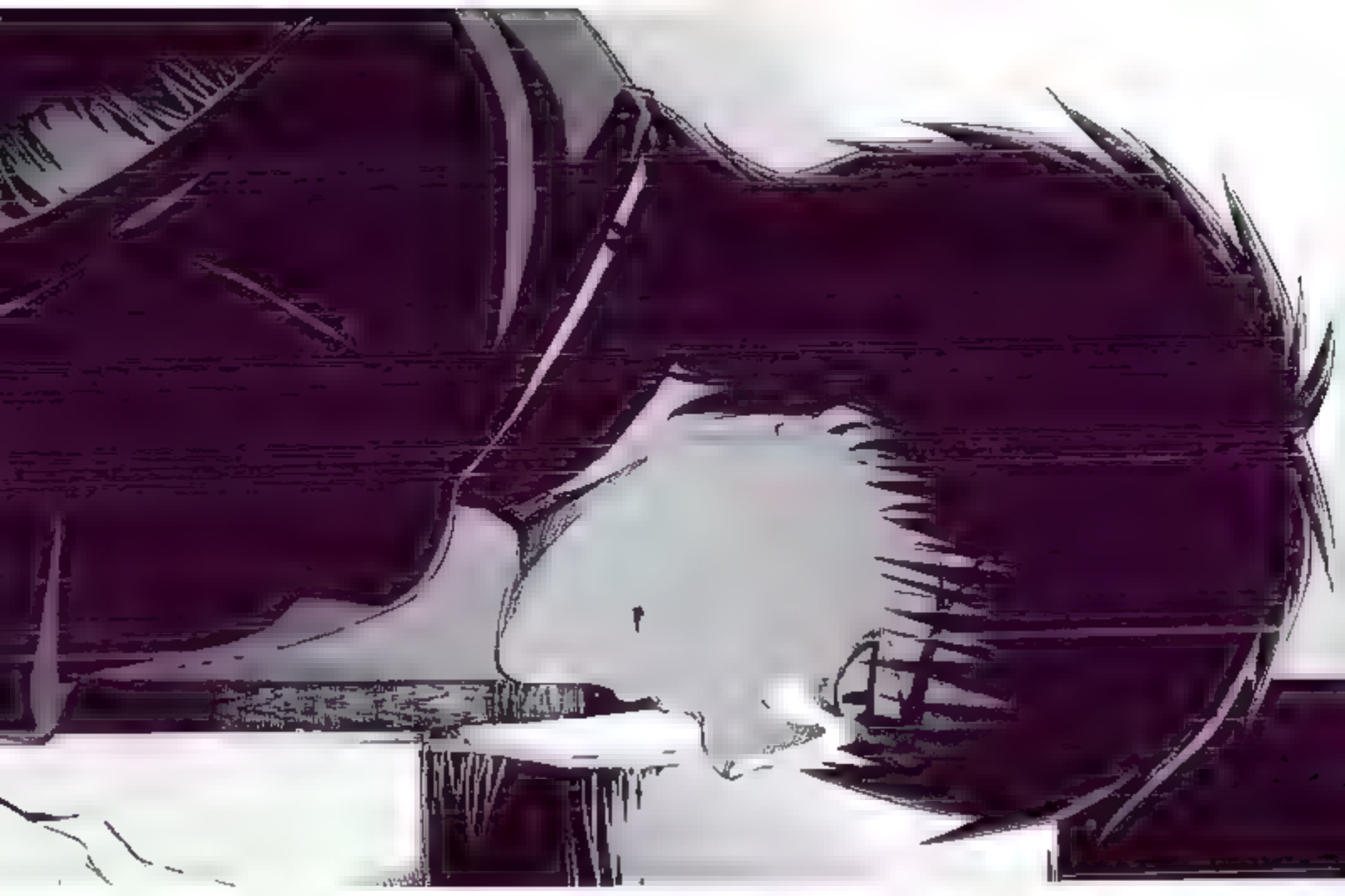
時臣が我に示した忠義
あれはすべて嘘偽りだったと言うのか？
彼はたしかに英雄王ギルガメッシュに対しては掛け値なしの敬意を払っていたのだろう
だかサーヴァントであるおまえは別物だ
いわば英雄王の写し身彫像や肖像画と同列の存在でしかない
画廊では一番見栄えのする場所に飾るだろうし
前を通るときは恭しく目礼もするだろう
そしていざ模様替えの際に置き場かないとなれば丁重に破棄させていただくというわけだ

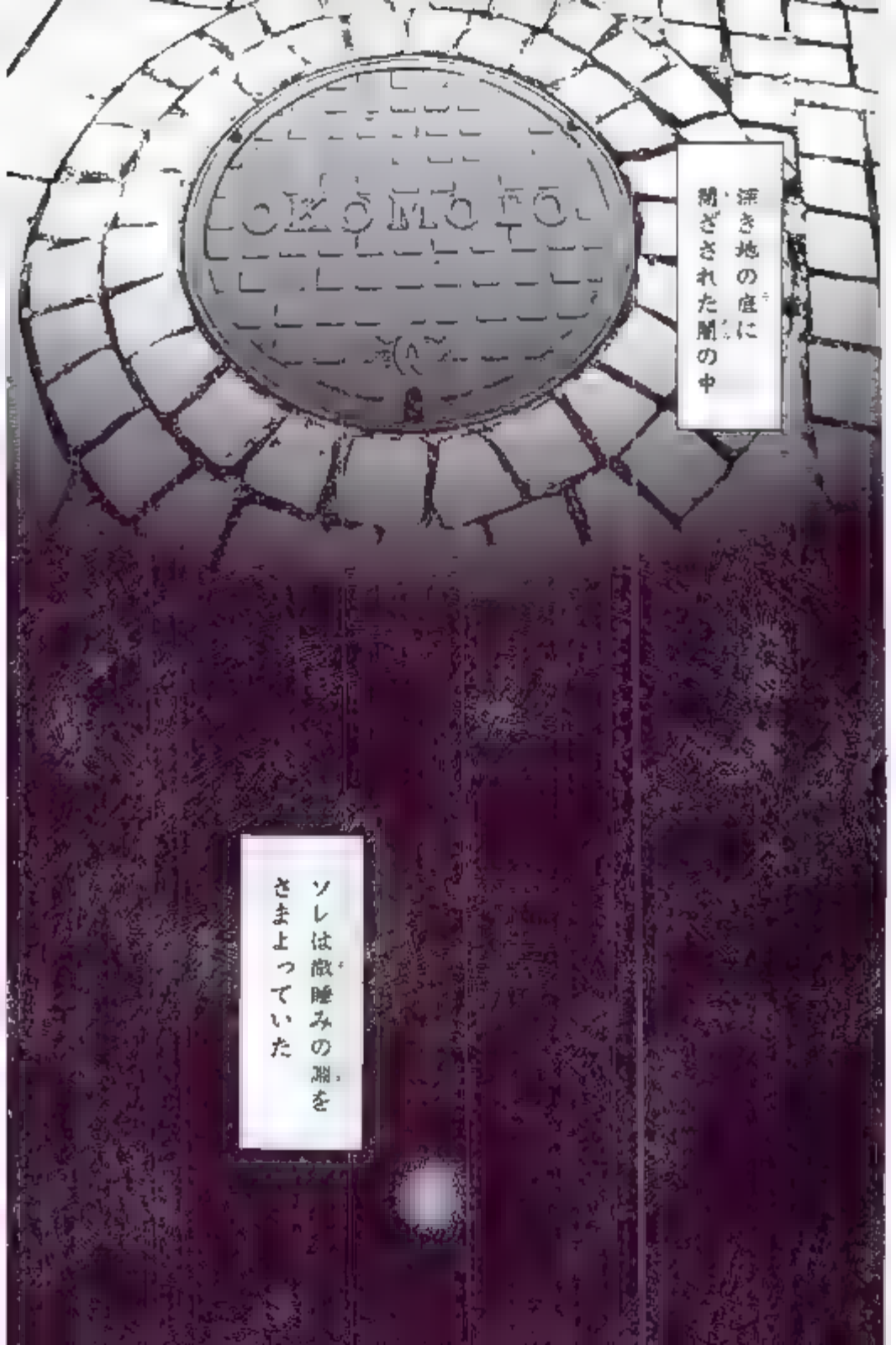

結局のところ
時臣師は骨の髄まで
"魔術師"だった
というだけのことだ
突き詰めれば
サーヴァントという
存在が道具に
すぎないことを彼は
冷静に弁えている
英霊は崇拝しても
その偶像には
幻想など抱かない
時臣め――
最後にようやく
見所を示したな
あの退屈な男も
これでやっと我を
愉しませることが
できそうだ


さてどうする
英雄王？
それでもなお
おまえは時臣師に
忠義立てして
この私の叛意を
咎めるか？
いかに我でも
完全にマスターを
見限ったのでは現界に
支障をきたすしな
さあどうした
ものかな
いかに
不忠者とはいえ
時臣は今なお我に
魔力を捧げている

ああそういえば
人――
令呪を得たものの
相方からおらず
契約からはぐれた
サーヴァントを
求めているマスターか
いた筈だったな
そういえば
そうだった

だが果たして
その男
マスターとして
英雄王の眼鏡に
適うのかどうか
問題あるまい
堅物すぎるのが
玉に瑕だが前途は
それなりに有望だ
ゆくゆくは存分に
我を愉しませて
くれるかもしれん




深き地の底に
閉ざされた闇の中
ソレは微睡みの淵を
さまよっていた

深い眠りの中
夢に見ていたのは

かつて遠い日に
託された
途方もない
無限もない
「祈り」の数々

真っ白な世界を

汚なき魂で
ありたいと——

真っ白な人生を

そう渇望するあまり
すべての悪性を命所に
求めずにはいられなかった
いと弱き人々の願い

その"祈り"に
応えることで
かつてソレは
ひとつの世界を
救済した

我が身の外に
善はなし

我が身の他に
罪は無し

償うべきは
我一人

憎むべきは
我一人

そう請け負う
ことで罪人を救い
彼らに安寧を
もたらした

故に　ノレは
救済者にして
審者でなく

贖罪もなく

呪われ

時の流れの中で
いつ…かヒトで
あった頃の名前
さえ奪われ

その"生き方"に
ついての呼称でのみ
語り継がれる概念に
成り果てた

被造れ：

嘆かれ

六〇年ほど前

ソレにとっては
瞬き一つほどの
昔のお

気がつけば
暗く生温い母胎の
ような場所にいた

地の底に
深く息づく
無窮の闇

かつてそこは
無限の可能性を
秘めた〝卵〟の
ような空間だった

ソレは胎児のように
その地に宿り

母の胎盤から滋養を
授かるが如く
古代の地に流れ込む
魔力を喰らい

肥え太りながら
ただ時を待つ

いつの日か
この深く暗い闇を抜け
産まれ落ちるその時を

ふと ソレは
すぐ間近から
聞こえた声に
耳を傾ける

ああ――呼ばれている

招かれている
祝福とともに

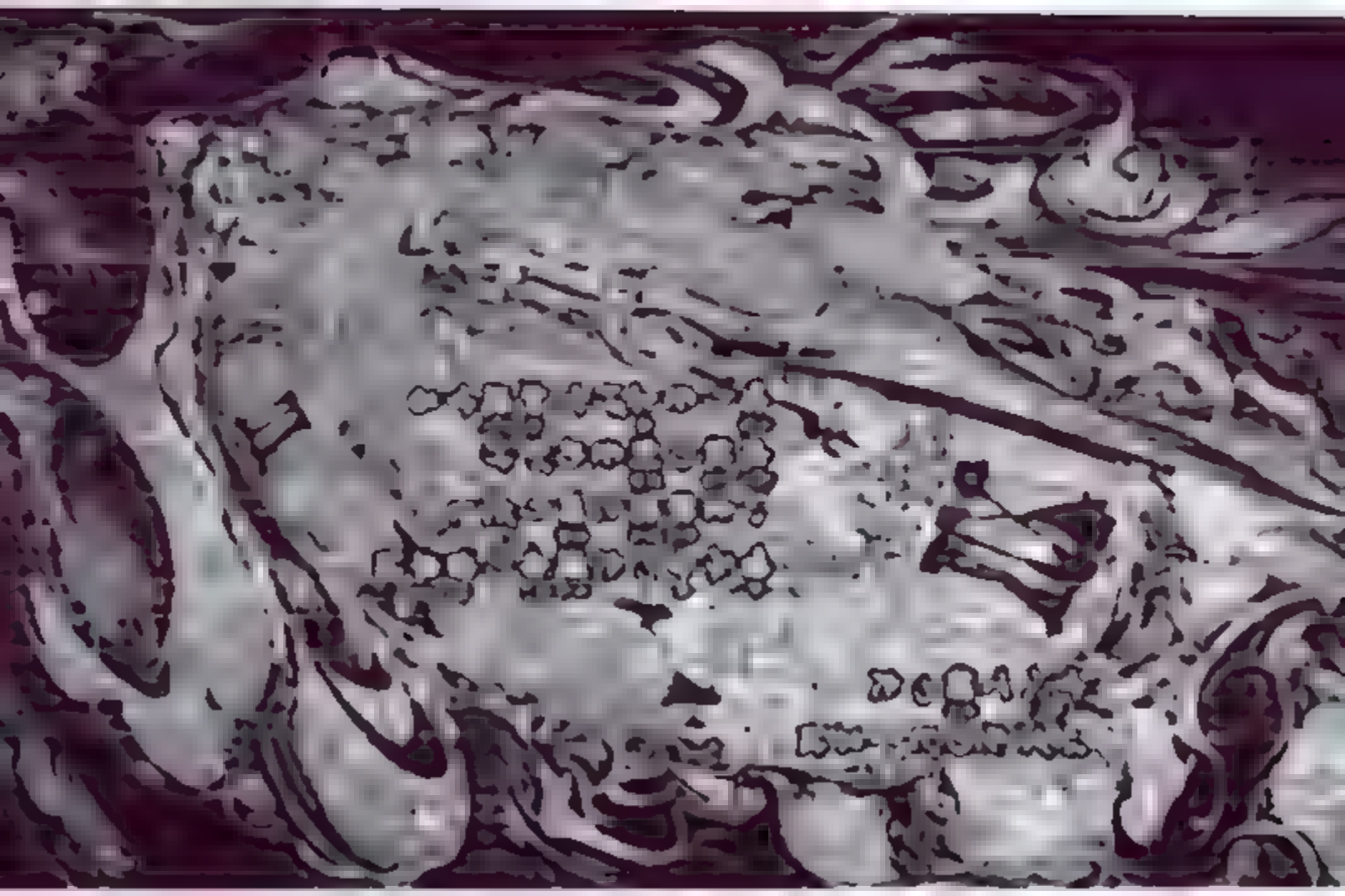
応えてやれる
今ならばきっと

所に関の中で
最大に成れ上がった
魔力の満は
ソレに喰たる者を
与えつつある

かつて遠い日々に
託された数多の
"祈り"の数々も
今ならば具現か
叶うだろう

"祈く在れ"と
祈られた様そのままに

"祈くの如く為せ"と
望まれた所行の全てを



春乃えり、綾野貴弘、夏目りく

NEXT Fate/Zero
—sometime,somewhere—

たとえこの世の全ての悪を相うことになろうとも

そして、第四次聖杯戦争は最終局面へ。

Fate/Zero第⑩巻
2015年発売予定!!

Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

Fate/Zero ⑨

著者

真じろう

原作：虚淵玄（ニトロプラス）／TYPE-MOON

2014年12月29日初版発行

発行者

堀内大示

発行所　株式会社KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　電話／(03)3238-3521（営業）

http://www.kadokawa.co.jp/

編集　角川書店

〒102-8078 東京都千代田区富士見1-8-19　電話／(03)3238-8541（編集部）

装幀・デザイン

和田幸男

印刷

大日本印刷株式会社

製本

大日本印刷株式会社

初出／『ヤングエース』'14年7月号～11月号

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁本は、送料小社負担にて、お取り替えいたします。KADOKAWA読者係までご連絡ください。（古書店で購入したものについては、お取り替えできません）

電話0049-259-1100（9:00～17:00/土日、祝日、年末年始を除く）

〒354-0041　埼玉県入間郡三芳町藤久保550-1

この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。

2014 KADOKAWA CORPORATION, Printed in Japan

©Shinjiro 2014　©Nitroplus/TYPE-MOON

ISBN978-4-04-102023-4 C0979

KADOKAWA